

第Ⅲ章 遺 跡

1 第一次大極殿院の地理的状况

奈良盆地北端のほぼ中央、三方が山や丘陵で囲まれ、南に平地が広く開ける地に平城京は造営されている。平城京は和銅元年（708）に元明天皇が下した平城遷都の詔から、古代中国の設計思想にしたがい四神相応と称される吉相の地を選んで建設されたことがわかり、平城京の平面もまた中国の都城とりわけ唐の長安城にならい宮を京の北端中央に配置する形式を採っている。したがって、平城宮は地勢上、平城京の背後に控える奈良山丘陵の南麓に位置しており、全体に緩やかな南下がりの地形となっていることが第一の特徴として挙げられる。ただし、一見平坦に見える平城宮内には、自然地形を反映した起伏があって、奈良山丘陵から南へ舌状に延びる3本の支丘の存在が確認でき、発掘調査やボーリング調査の結果から、丘陵を削り谷地を埋めて全体に平坦な宮内の敷地を造成したことが判明している。3本の支丘のうち東側の支丘上には東院、中央の支丘上には第二次大極殿院、そして西側の支丘上には第一次大極殿院が位置しており、主要施設を地理的な条件が良い丘陵上に配置するように宮内の施設配置が計画されていることがうかがえる。

平城京の建設にかかわる明確な資料は現在に伝えられていないが、中国の都城との関係を踏まえれば、平城京の設計上の基点が、北極星、すなわち天の中心を意味する大極殿に置かれていたことは想像に難くない。上述したように大極殿は奈良山丘陵から奈良盆地に延びる支丘上に建設されているが、同時に大極殿や朱雀門、朱雀大路等が配される平城京の南北の中心軸は古代の基幹道路の一つである下ツ道と一致していることが知られている。下ツ道は南北に長い奈良盆地の中央部を南北に真直ぐ延びる道路であり、その名が示すとおり盆地内の標高が最も低いところを縦貫し、古代における交通の大動脈として機能していたと考えられている。平城京の建設はこの下ツ道の軸線を京全体の中心軸と定め、この線上に大極殿の立地を定めることから始まったと考えることができる。

古代における第一次大極殿院の地形については『平城報告Ⅺ』の中で、発掘調査で確認された土層とボーリング調査による土質サンプルにもとづく詳細な復原検討がなされている。その成果によれば、第一次大極殿院は丘陵の自然地形である南緩斜面や段丘を利用し、段丘上に大極殿を含む大極殿院の北半を配し、切土と整地土によって南から北へ段状に高くなる院内の地形を造成しており、自然地形を巧みに利用した建設計画の一端をみてとることができる。

現在、第一次大極殿院地区からは、北は奈良山丘陵、東は若草山、西は矢田丘陵ごしに生駒山まで望むことができ、また正面に広がる平地の向こうには、遠く吉野の山々まで見渡せる絶好の立地であることが実感できる。第一次大極殿院は、下ツ道と交わる奈良山丘陵から張り出した支丘上で、東西南の三方に視界が開ける高台を選んで定められたのであろう。このように

地理的環境から読みとれる第一次大極殿院の立地は、平城京の設計思想の基底をなして、その構造や建設過程にも少なからず影響をおよぼしていると思われる。

2 地形造成の変遷

第一次大極殿院地区は、丘陵の傾斜のとおり北から南へ緩やかに下がる地形を基本とする。地区の北部と南部では約5mの高低差があり、この差をうまく利用して、区画内の施設を計画的に造営している。また、第一次大極殿院地区の北西部分は造営前の地形が特に低く、X-144,898付近では、Y-18,955付近から西に向かって急激に下がることが確認されている。地区の北側は、東半の地山の高い部分では地山を削り出して平城宮造営時に整地作業をおこなっているのに対し、西半では地山上に最大で約2mもの盛土を施して平坦面を築いている。また、地区の南辺では、青灰色の地山上に整地（南面回廊付近では約30cmが残存）を施す。このように、第一次大極殿院地区の造営にあたっては、地山の高いところは削り、低いところは盛土をして全体の整地をおこなったうえで区画内の諸施設を築いているのである。なお、南面築地回廊周辺にみられる黒褐色粘質土（第一次大極殿院整地土）から、和銅3年（710）の紀年木簡

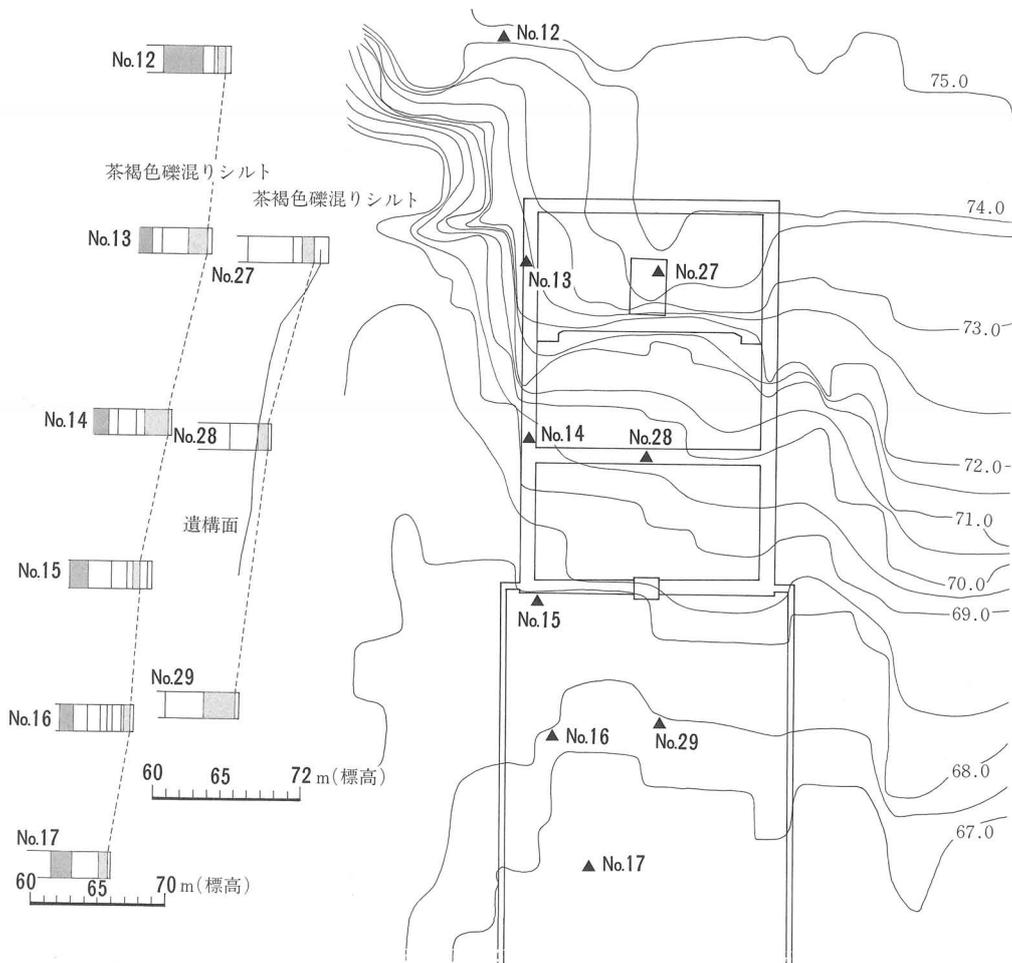


図19 現状地形とボーリング調査（『平城報告Ⅺ』より転載）

が出土していることから、第一次大極殿院地区は、平城京が遷都された段階ではまだ完成していなかったことがわかる。

地区の西辺では、黒褐色粘質土の整地を施し（第一次大極殿院西辺整地土：I-1期）、基幹排水路（SD3825A）を南北に通す。この基幹排水路の上流には後の佐紀池の前身となる水源があったものとみられる。地区の東辺にも基幹排水路（SD3765）を設ける。

整地をおこなった後、第一次大極殿院を画する築地回廊と回廊内部を整備する。回廊部分は、北側の地山の高い東半では地山を掘り込んで、その他の整地を施した部分では、整地土を掘り込んで掘込地業を施すか、整地土の上に直接回廊基壇土を積み、回廊を造成する。回廊の内側は、地山を削り出して土壇を造り、土壇の前面に磚を積んで擁壁を築く。土壇上には大極殿と後殿を中軸上に建て、周囲は礫を敷いて舗装する。土壇より南では、整地土の上に礫を敷き広場面を形成する。以上が平城宮造営当初におこなわれた第一次大極殿院地区の造営内容である（I-1期。時期区分については次項で述べる）。

その後、地区の東辺では基幹排水路（SD3765）を埋め立て、その東側に新たな基幹排水路（SD3715）を設ける。第一次大極殿院地区の南には中央区朝堂院が造営される（I-2期）。南面では南門の東西で築地の一部を取り壊して2棟の楼阁建築を増築する。それまで回廊内部の内庭部分は、北から南へと緩やかに傾斜し、雨水などの排水は回廊入隅部に設けられた雨落溝で受け、回廊の外へは東南隅と西南隅に設けられた木樋暗渠によって排水していた。しかし楼阁の増築にともない、南面回廊北雨落溝より北約16mの位置に新たに東西溝を設け、南面回廊から東西溝の間は盛土によって地面の傾斜を逆にして東西溝に水を集め、東面および西面回廊の雨落溝を通して回廊の外へ排水するように変更した。この排水計画は奈良時代前半を通じて踏襲される。

またこの頃、区画の西では再度盛土がなされ整地がおこなわれる（第一次大極殿院西辺整地土：I-2期）。造営当初の整地土の上に新たに土を積み、佐紀池を造成し、基幹排水路の取水口を佐紀池の南岸に設け、基幹排水路を改修する。I-2期の整地土より神亀の年紀をもつ木簡が出土しており、その年代が明らかである。

恭仁京から遷都直後のI-4期には、築地回廊の基壇を貫く木樋暗渠を増設し、それにともない築地回廊内側の雨落溝を改修し、内庭広場の礫を敷き直す。地形はI-2期を踏襲しており、変更はない。しかし、築地回廊を貫く暗渠を大幅に増設しており、特に南面築地回廊の東西隅部に多くの木樋が集中していることから、区画内の排水に苦心したようである。

奈良時代後半（II期）には、奈良時代前半の区画を変更する。区画を限る築地回廊は、東西幅は奈良時代前半の築地を踏襲し、南北幅を狭め、新たにほぼ正方形の区画を設ける。区画内は、区画を南北に2分する位置まで、I期以来の段差を南に拡張するように盛土をおこない、壇の前面に石積みの擁壁を設ける。壇上には新たに殿舎群を建て、地表面は礫敷舗装を施す。段の南側の広場にも、礫が敷き直される。区画の西側は再度整地がおこなわれ、基幹排水路を改修している。

平安時代初頭のIII期の遺構も若干の整地土がみられる以外はII期とほぼ同じ面で検出しており、III期には大規模な地形造成はおこなわれず、II期の地形を踏襲したと考えられる。

3 検出遺構

検出した遺構は、層位、出土遺物、配置等により、Ⅰ～Ⅲ期の大きく3時期の変遷が認められる。Ⅰ期はさらにⅠ-1～Ⅰ-4期の4時期、Ⅲ期はⅢ-1・2期の2時期に区分される。各時期の年代比定と遺構変遷については第Ⅴ章で詳しく述べることとし、ここでは検出した各遺構について説明する。遺構は時期ごとに述べ、さらに①区画内の遺構、②区画施設、③区画外の遺構、と分けて説明する。なお、すでに『平城報告Ⅺ』で報告している遺構で、今回新たな知見のない遺構に関しては報告を割愛したが、新たに検出した遺構と関連するものについては再度報告する。

遺構の大半は国土方眼座標（第Ⅵ系）に対して北で西にわずかに振れる。『平城報告Ⅺ』では平城方位（内裏北面築地回廊SC60の北雨落溝の方位を基準としたもので、国土方眼座標北に対して西に $0^{\circ}07'47''$ 振れる）に近い数値を採るとした。本報告ではⅠ期南面築地回廊の中心の点（X-145,115.109、Y-18,850.353）と、SB7200（大極殿）基壇の中心（X-144,870.673、Y-18,851.236）を通る直線を、第一次大極殿院地区南北方向の中軸とする。その振れは北で西に $0^{\circ}12'26''$ である。

遺構の柱番付は建物の南東隅の柱を起点とし、模式図を付した¹⁾。

A 奈良時代以前の遺構

本報告範囲における奈良時代以前に属する遺構はわずかである。

SD3840（遺構実測図17・18・19、図版9）

第28次調査区を、北西から南東に流れる溝。幅約1.6m。断面はV字形で、堆積土最下層（灰色粗砂）より、弥生時代後期の土器片が出土した。SK3833に掘り込まれる。

SD18222（遺構実測図18、図版9）

SD18220の下層で検出した古墳時代の自然流路。北西から南東方向に流れる。埋土より埴輪・布留式土器や炭化材などが出土した。

B Ⅰ期の遺構

Ⅰ期は、南北317.9m、東西176.9mの、築地回廊によって囲まれた区画で限られる。区画の内部は北3分の1を壇状に造り、前面に磚積みの擁壁を設ける。壇上の中央には大型建物2棟を南北に配置し、擁壁より南は礫敷の広場とする。また、東西の区画外には、平城宮内を南北に横断する基幹排水路が設けられる。以下、各時期の遺構を説明する。

i Ⅰ-1期の遺構

平城宮造営当初。大極殿と後殿、区画施設などを造る時期である。

①区画内の遺構

SB7200（遺構実測図8・9・10・13・14、図版10・11・12・13、図20・21）

大極殿 SB7200は基壇地覆石の据付・抜取痕跡を検出した大型建物で、第一次大極殿に比定される。

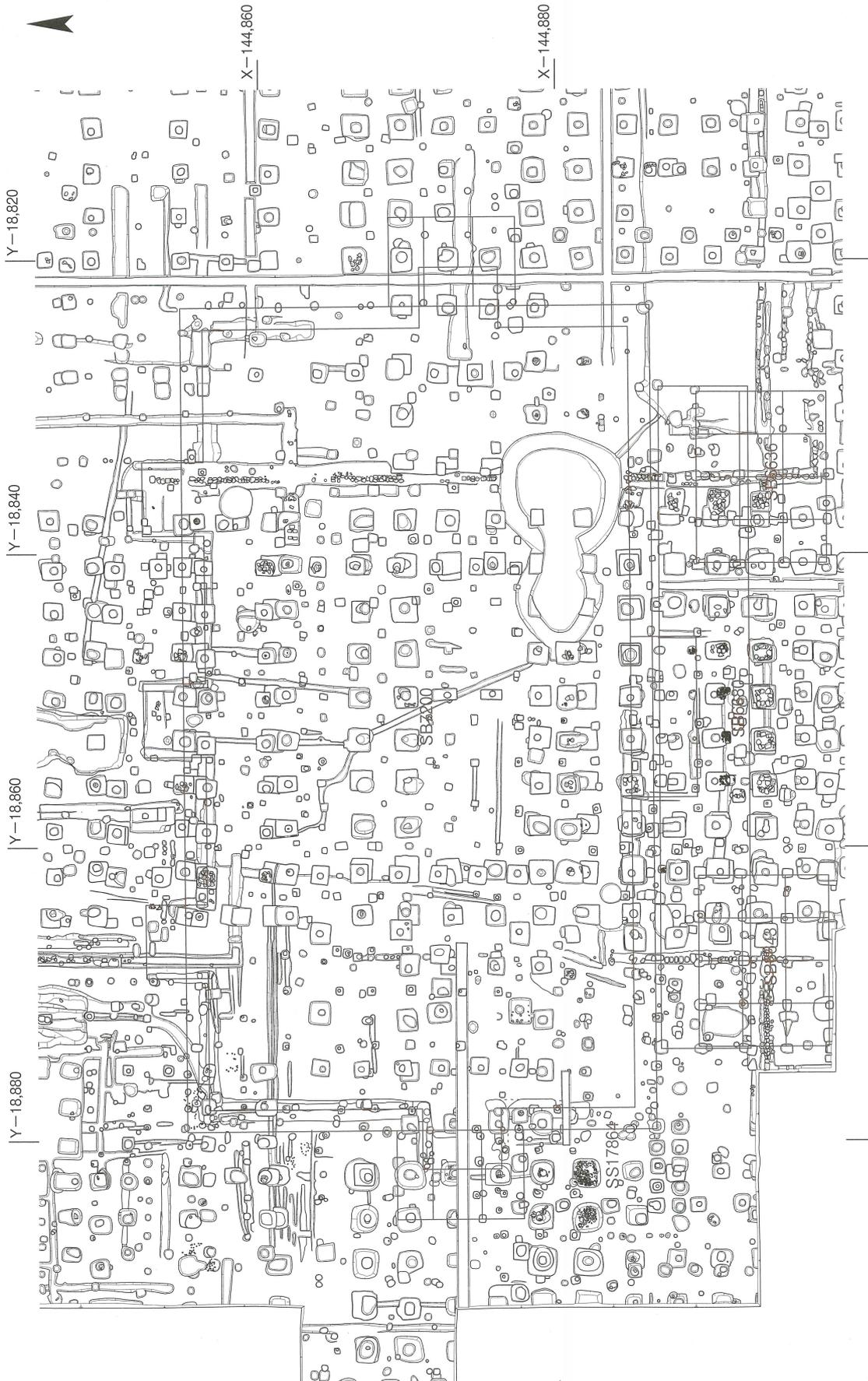


図 20 大極殿 SB7200 遺構平面図 1 : 400

南東部分と南西隅部は削平が著しいため、地覆の痕跡は残存していなかったが、北西部分では溝状の据付痕跡と抜取痕跡が明瞭に遺存していた。東西幅は抜取痕跡の心々で53.2m、南北幅は28.7mとなる。地覆据付掘方は、幅1.3~1.6m、深さは内側が深く、外側は徐々に浅くなり、深い部分で20cm程度残存する。埋土は茶灰褐色砂質土。抜取痕跡は幅0.4~0.5mで、ほぼ垂直に立ち上がる。深さは約15cm程度が残存し、埋土は黄灰褐色砂質土で、凝灰岩片や瓦片を含む。この凝灰岩片は、分析の結果、「流紋岩質溶結凝灰岩（いわゆる竜山石）」と「流紋岩質凝灰角礫岩（二上層群ドンゾルポー累層産出）」であることがわかった。

東面以外の3方では地覆痕跡が外側にコの字形に突出する部分があり、いずれも階段の取りつきを示す遺構である。北面は全体を4分する位置に3基あり、階段幅はそれぞれ等しく、溝の心々で約5.0m（17尺）、階段の出は約4.2m（14尺）となる。北面中央階段と北面東西階段の心々間距離は約15mである。西面は階段を中央南寄りで1基確認した。階段幅は約5.2m（17尺）、階段の出は約4.2m（14尺）となる。南面は、中央に1基の階段痕跡を確認した。階段の幅は約10.9m（37尺）、階段の出は約4.4m（15尺）。他の階段と異なり、階段が位置する部分にも基壇地覆の痕跡がある。後述のSB6680などの前面に建つ建物との関係より、南面階段は基壇造営後しばらくして設置されたと考えられる。東面は、階段の痕跡は確認していないが、以上の成果より、西面と同規模の階段が備えられていたと想定する。また、これらの階段の位置と基壇の規模からSB7200の建物の規模は、桁行7間、梁行2間の身舎に1間の廂がまわり、柱間寸法は桁行約5.0m（17尺）、梁行約5.3m（18尺）、廂の出約4.4m（15尺）と考えられる²⁾。

これらの成果をまとめると、発掘遺構より導かれる基壇の規模と詳細は以下のとおりとなる。すなわち、SB7200の基壇規模は、東西53.2m（180尺）、南北28.7m（97尺）となり、階段は、南面中央に1基、北面に3基、東西中央南寄りにそれぞれ1基が取りつくこととなる。

基壇外装は、地覆の据付痕跡が、外側が浅く内側が深く下がる2段掘りとなることから、地覆の外側に延石を設けていなかったと考えられる。また、地覆の抜取痕跡はほぼ垂直に立ち上がっているため、地覆石は抜取痕跡の中におさまると考えられ、その場合地覆石の幅は1.2~1.3尺と推測できる。さらに、地覆の抜取痕跡の埋土より凝灰岩片が出土していることから、基壇外装に使用された石材は凝灰岩と考えられる。

SB7200の南では、後述する東西棟建物SB6680を検出している。『平城報告XI』では、SB6680の中央3間の柱間の広い部分は、SB7200建設当初に設けた南面階段の位置に相当するため、他より柱間間隔を広げて階段を避けていたと解釈した。しかし、北面階段と同規模の階段が南面にも設けられていたと仮定し、北面階段を南面に折り返すと、SB6680の柱穴と重複

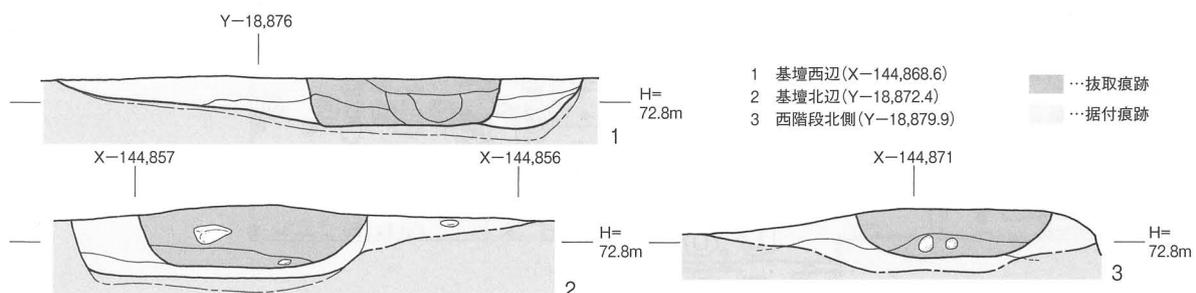


図21 SB7200 基壇・階段外装据付・抜取痕跡断面図 1:20

してしまい、階段幅が北面階段よりも狭くない限り、両者は併存しない。また、SB7200の南面西側階段が検出されなかったことより、SB6680は、SB7200の南面に階段が存在しなかった時期に建てられたものと解釈できる。すなわち、SB7200の南面階段は、北面階段のように3基存在したのではなく、中央に北面階段よりも幅の広い階段が1基のみ取りついでおり、この南面階段は、SB7200建設当初は存在せず、後に敷設したものとなる。このことは、南面階段の突出位置において基壇外装の痕跡が延長していることから想定できる。

このほか、基壇土、柱穴などの建物に関する遺構は確認できなかった。また、雨落溝が確認されていないことと、壇上西部で造営当初の舗装と考えられる礫敷遺構が確認されていることから、SB7200には雨落溝を設けず、周囲は礫敷で舗装されていたと考えられる。

SS17864 (遺構実測図8・9・10・13・14、図版10・11・12・13、図20)

地覆石据付痕跡より約1.5m離れた位置で検出した小穴列で、SB7200にともなう足場穴と考えられる。柱間は2.1~3.3mと不規則で、柱穴の直径は40~50cm、深さは40cm程度が残存する。

足場穴

SB6680 (遺構実測図13・14、図版14、図20)

SB7200の南に位置する桁行9間×梁行1間の掘立柱東西棟建物。柱間は、桁行は東から2、5、8間目を約5.5m(19尺)とし、他は約4.8m(16尺)で、梁行は約6m(20尺)である。第295次調査で、改めて北東部の柱穴3基を確認した。柱掘方が約0.8mと小振りであるため、仮設的な建物と考えられる。

SB6643・SB6636 (遺構実測図13・14、図版14、図20)

大極殿SB7200の南に位置する掘立柱建物。SB6643は、『平城報告XI』では桁行4間、梁行4間と推定していたが、第295次調査で未発掘部分を調査したところ、北側1間は検出されず、梁行3間の掘立柱の東西棟総柱建物であることが判明した。SB6680との重複関係は不明。柱間は、桁行、梁行ともに約3.0m(10尺)等間。柱掘方は隅丸方形で、一辺約0.8m。

また、この成果を受け、SB6636も梁行3間の掘立柱の東西棟建物と改める。柱間、柱穴の規模等は、SB6643と同じである。

SB8120

大極殿後殿である。北面築地回廊南雨落溝SD130から南に延びるL字形の溝SD244を、北面築地回廊から後殿へ接続する歩廊の東雨落溝、SD244の南東の南北溝SD8103を後殿の東雨落溝と考えると、後殿が存在したと解釈することができる。この場合、後殿の基壇規模は東西51m以下となり、南北幅は不明。後殿そのものの遺構は未検出であり、大部分は未発掘部分に位置すると考えられる。

SX6600・SF9232A・SF14255A (遺構実測図12・13・14・15・16、図版15・16・17、図22・23)

区画内部の北3分の1の位置で、丘陵の支脈をほぼ東西に切り崩し、上部を削平して、SB7200などの遺構がのる広大な土壇を形成する。その土壇の段差の前面には、磚を積み上げた擁壁SX6600が築かれる。東半は『平城報告XI』で既報告であるが、西側入隅部より西側斜路へ続く部分と東側斜路の一部を新たに検出した。

磚積擁壁

磚積擁壁は、土壇の前面を東西に約100mにわたって直線的に延び、約55°の角度で東側は東南へ、西側は西南へ屈曲し(第1屈曲点)、約11m直進した後に、東側では東南東に、西側では西南西に約22°の角度で屈曲し(第2屈曲点)、さらに約12m直進した地点で南に折れ曲がり(第

斜路 3屈曲点)、東側斜路SF9232A・西側斜路SF14255Aを形成する。

東半では、地山を切り崩した直上に磚を積み上げるが、西入隅部より西では、地山の上に盛土を施し磚を積み始める。積み上げる際に、背面の地山壁面および盛土との間に、白褐色粘質土の裏込め土を入れ、前面を揃え、磚と磚の間にも同じ土を用いて積み上げる。盛土上に積む部分では、磚の破片をかませるなどの高さ調節をおこなっている。

擁壁は、最も残りの良い部分で最下段より7段までが残存していた。西側の斜路では磚積とその抜取痕跡とみられる溝を検出している。磚積の傾斜は、前面で約73°、第1屈曲点より第2屈曲点までは約70°、第2屈曲点より第3屈曲点までは約65°、第3屈曲点より南の斜路の部分は、斜路自体の積土が失われ、磚も最大3段分を残す程度で角度は不明である。

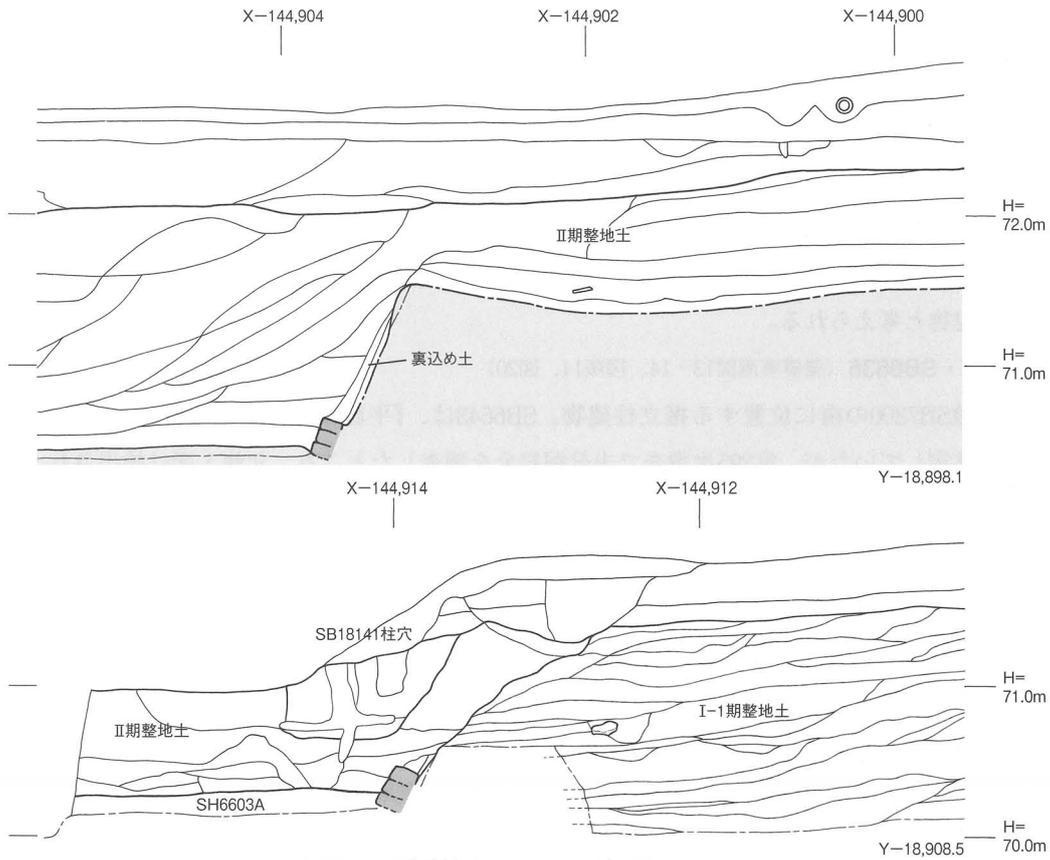


図 22 磚積擁壁 SX6600 断面図 1 : 50

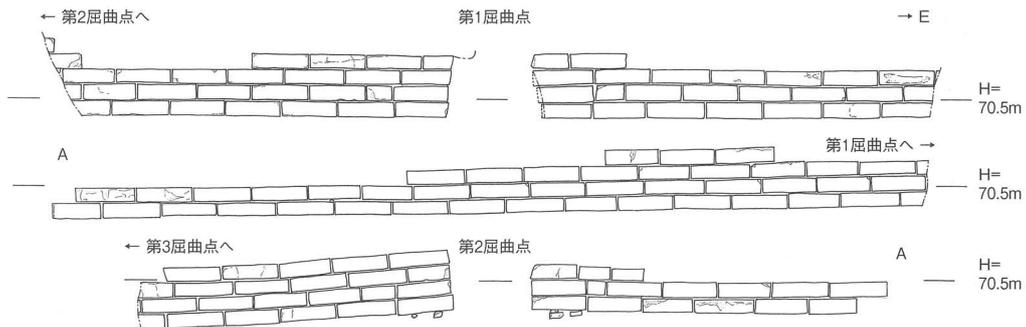


図 23 磚積擁壁 SX6600 立面図 1 : 80

磚積に使用される磚の法量は、長さ約30cm、幅15～16cm、厚さ約8.5cmで、目地を1段置きに揃える長手積みをも基本とする。屈曲点では、隙間をつくらないように斜めに打ち欠いたり、小口面が正面になるように揃えて積んだりといった調節をおこなっている。

擁壁の当初の高さは削平により不明であるが、仮に壇上の南北の傾斜をⅡ期で検出した南北溝と同じであるとして、SB7200の地覆石抜取痕跡検出高から南におろしてくると、擁壁の天端は標高72.6m程度となる。擁壁前面の礫敷面（SH6603A上面）との高低差は約2mとなり、磚は約25段積まれていたと考えられる。また、第3屈曲点から南の磚積から回廊雨落溝までの範囲を斜路の路面とすると、斜路の路面幅は約16mとなる。

SX17865（遺構実測図6、図版27）

平城宮造営当初の、SX6600北側の壇上部分の舗装面。径4～8cmの礫を整地土直上に敷き詰める。壇上の西辺付近にのみ残存する。西の限りは西面築地回廊東雨落溝の東肩を形成する見切り石までである。

壇上の舗装

SH6603A（遺構実測図14・15・20・21・22・23・24、図版18）

磚積擁壁SX6600の南から、回廊内側の雨落溝までに広がる、礫敷を施した大極殿院の内庭広場である。『平城報告Ⅺ』ですでに報告したところであるが、西半の状況と併せて改めて報告する。

内庭広場
(下層礫敷)

第一次大極殿院の造成段階では、北側の高い部分は地山を削り、南の低い部分は地山上に盛土をして整地をし、回廊の基壇土を積み上げ区画を整備する。磚積擁壁より南の内庭部分には、この整地土に径5～10cmの礫を敷き、内庭部分の舗装としている。

磚積擁壁際の標高は70.5m付近、南面築地回廊北雨落溝際では67.5m付近となり、約3mの高低差が認められ、北から南に緩やかに傾斜していることがわかる。

SD7142（遺構実測図15）

広場内を南北に通る素掘りの溝。幅約1.2m、深さ15cm。『平城報告Ⅺ』で既報告の遺構であるが、今回改めて検出状況を検討した。

SD7142は、X-144,925からX-145,072にかけて断続的に検出している。北端は第217次東調査区においても確認できず不明である。また、南にいくにつれ遺構が不鮮明となっている。もっとも良好に検出した北半部分では、内庭広場の下層礫敷SH6603Aを掘り込み、後述する上層礫敷SH6603Cに覆われるが、中層礫敷SH6603Bとの重複関係は不明である。よって、『平城報告Ⅺ』で報告したように、中層礫敷にともなう東西溝SD5590Aとの重複関係も不明である。

なおSD7142は、大極殿院地区の南北の中軸より東に18.5mに位置する。中軸の西側に対称の遺構を想定し、両遺構が広場内中央を通る南北通路の側溝とすると、溝と溝の間隔＝通路の幅は約37m（125尺）となる。

②区画施設

I期の区画施設は、周囲を複廊の築地回廊で囲い、南面中央に南門を設ける。

SB7801A（遺構実測図24、図版19、図24・25）

大極殿院の南面築地回廊中央に開く大極殿院の正門。『平城報告Ⅺ』で報告した後、北面階段西側と南面階段の調査をおこない、新たな成果を得た。旧成果と併せて報告する。

大極殿院
南門

南門SB7801は、基壇より上部が削平されており、柱位置を示す痕跡は失われている。しかし、

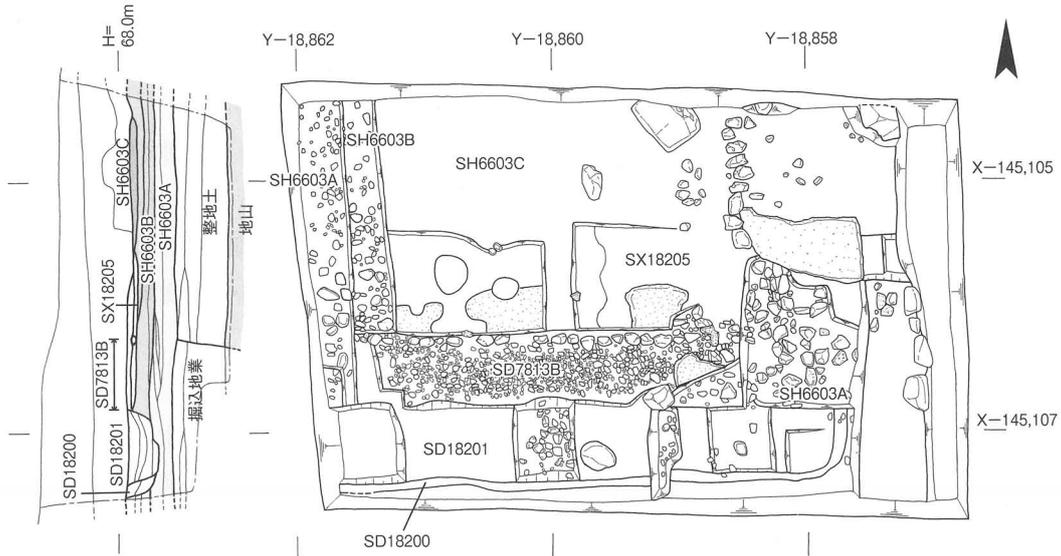


図24 南門SB7801北辺 平面図・断面図 1:60

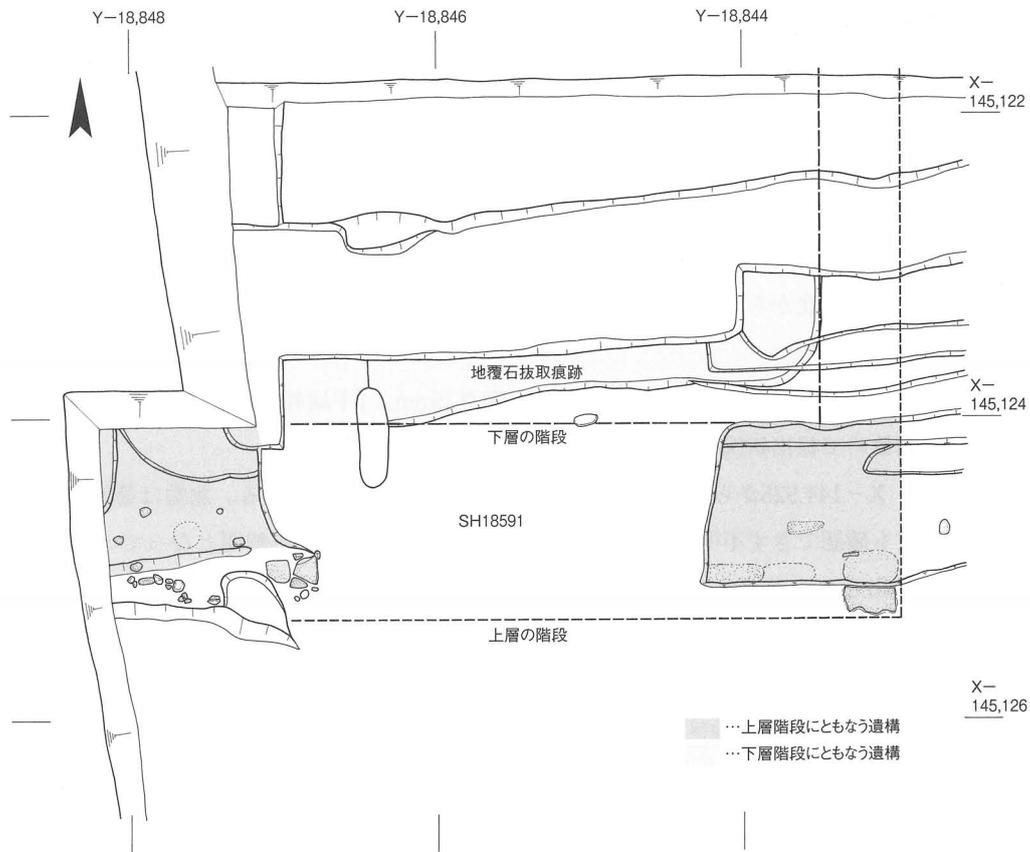


図25 南門SB7801南面階段地覆抜取痕跡 1:50

基壇にともなう掘込地業や、基壇外装と南面・北面階段の地覆の痕跡、その周囲を巡る雨落溝などにより、その存在と規模の想定が可能である。

南門付近では、地山上に30~50cmの整地土を積み、基壇の掘込地業を施す。掘込地業は、南北17.45m、東西31.2m、深さ50~60cmの方形で、掘込地業底部の四周と中軸線の東西約5.7

mのところでは帯状に礫を敷く様子が確認されている。このうち北辺と西辺以外では深さ20～30cmの溝を掘り込んで礫を詰めており、さらに東南隅を40cmほど深く掘り込んで礫を詰め込んでいることが確認された。基礎部分の水抜き役を担っていたとみられる。掘込地業は版築により、礫混じりの粘質土と砂混じりの粘質土を5～10cmの厚さで交互に積み重ねている。掘込地業の上には礫混じりの粘質土を積んで基壇を造成するが、様相が一様ではなく、南面築地回廊基壇の積土とも混じり合うことから、南門と回廊の基壇は一連の工程で施工されたと思われる。

基壇の北面では、基壇外装の据付痕跡SD18200、抜取痕跡SD18201を検出した。SD18201は上層礫敷面で検出した遺構で、『平城報告Ⅺ』ではSD7852Bとして報告したものである。地覆の改修にかかわる痕跡は確認できず、後述のように北面および南面の階段は改修されたが、基壇そのものは改修されなかったと考えられる。また、この時期に対応する雨落溝は検出できなかった。

基壇に取りつく階段は、北面および南面でそれぞれ確認された。北面階段は、上層礫敷・中層礫敷・下層礫敷それぞれにともなう痕跡が確認され、造営以後2回の改修がおこなわれたことがわかる。造営当初の北面階段の遺構は、階段正面の地覆抜取痕跡とみられる溝を確認しており、規模は幅約45cm、深さ約20cmで、この溝から基壇外装抜取痕跡までの距離（階段の出）は1.1m（3.7尺）となる。

南面階段については2時期の遺構を確認した。下層は、踏石の据付掘方と抜取痕跡を確認しているが、抜取痕跡が据付掘方を大きく壊しているため据付掘方が確認できたのは断面観察のみである。抜取痕跡は幅約80cm、長さ約2.8mが残存する。石材は全く残っていない。これらの階段痕跡の南側には朝堂院礫敷SX18591が広がる。

以上の遺構より想定される基壇の規模は、東西27.8m（94尺）、南北16.2m（54尺）である。北面階段は東西幅15.4m（51尺）、階段の出は1.1m（3.7尺）、南面階段は東西幅13.2m（45尺）、階段の出は約68cm（2.3尺）である。

SC7820（遺構実測図22・23・24、図版22・24、図26・27）

大極殿院の南面築地回廊のうち南門SB7801より西側の部分で、東側のSC5600に対応する。築地本体は削平のため残存しないが、基壇土、南北雨落溝、側柱礎石痕跡などを確認した。

I 期南面築地回廊西半

基壇の造成過程を順に説明する。まず、青灰色粘土の地山上に厚さ15～30cmの整地土を広

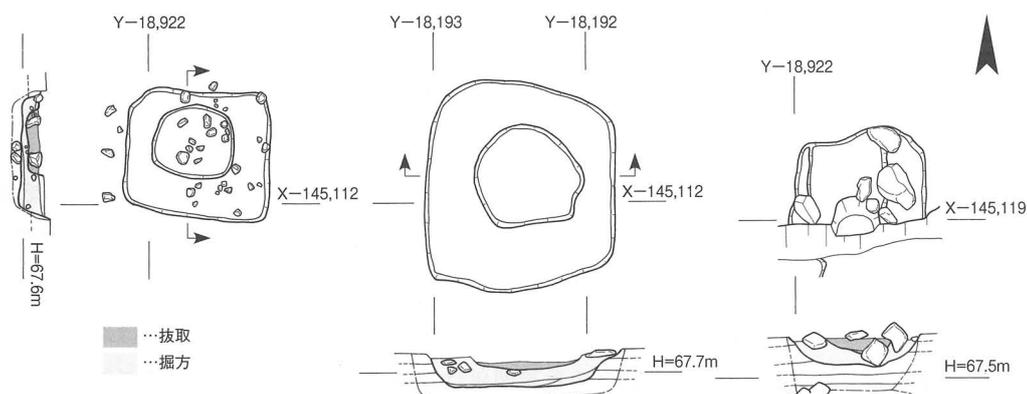


図26 南面築地回廊 SC7820 側柱礎石据付・抜取穴 1:50

く敷く。整地土は、木簡等の木質遺物を含む黒褐色粘質土や暗灰褐色粘質土で、黒褐色粘質土はY-18,910付近を西限とし、それより西には広がらない。地山は西にいくにつれ徐々に低くなっており、それにともない整地土も上面を水平に保つように徐々に厚く積まれる。

掘込地業は、南門側の約30mの範囲でのみ確認した。回廊心の部分、幅約0.8mを畦状に掘り残し、その南北を深さ40cm程度掘り込む。中央を掘り残す地業は、東半のSC5600や東面築地回廊SC5500でも確認されている。地業内は、橙灰色土と暗灰色土を厚さ8~10cmの単位で版築状に積み、中央の掘り残し部分の上面のレベルで平坦にする。掘込地業をおこなっていない西端では、整地土および地山を掘り込んで幅20~35cmの浅い溝を掘る。基壇土を積み範囲を示したものか、基壇外装の抜取痕跡とみられる。掘込地業をおこなわない部分では基壇土と整地土の間を礫敷とすることが確認できた。この礫敷は東寄りの部分で顕著であり、人頭程度の礫を敷き並べるが、西にいくほど礫が小さくなり、また密度もまばらになる。

基壇土は、厚さ30~40cm程度が残存する。灰褐色砂質土や黄褐色・茶褐色粘質土を厚さ5~8cmの単位で版築状に積み上げる。

基壇外装はすべて抜き取られて残存しないが、基壇外装の据付・抜取痕跡を確認した。北面基壇外装の痕跡は2時期確認でき、下層礫敷にとまなう地覆据付・抜取痕跡SD18519A・Bと、上層礫敷を掘り込み、築地回廊解体時の瓦だまりに覆われる上層の地覆据付・抜取痕跡SD18520A・Bがある。SD18519A・Bは、西楼より西側の断面でのみ確認した。回廊の基壇土を積み上げた後、基壇土の北辺を切り込んで地覆を据え、礫の混じった黄灰色粘質土を裏込めにする。一方南面基壇外装は、削平により遺構の残存状況が良くないものの、断続的ではあるが約32m分の幅70cm程度の溝SD18521を検出した。

基壇の上面は削平を受け礎石は残存しないが、礎石の据付痕跡が残存する。礎石据付痕跡は、一辺0.8~1.4mの方形で、遺構検出面からの深さは最大25cmである。一部の据付穴には径15~40cmの根石とみられる玉石が残存する。また、もっとも東の礎石据付痕跡は検出できなかったが、南面築地回廊廃絶時に上面を削平されたとみられる。すなわち、南面築地回廊の基壇は南門の基壇に向けて徐々に高くなっていったと考えられる。

以上より、南面築地回廊の規模を整理する。南北の地覆抜取痕跡より導かれる基壇の幅は10.5~11.0mとなり、『平城報告XI』で提示したSC5600の基壇幅10.8mと同規模であろう。柱間寸法は、梁行が総長約7.09m(24尺)、桁行が1間約4.58m(15.5尺)、西端の2間は3.54m(12尺)となる。このうち梁行中央の棟通りには築地があったと想定されるので、梁行1間、すなわち築地心から各側柱心までの距離は12尺となる。また基壇の高さは、出土遺物から礎石の大きさを高さ50~60cmに設定すると、下層の内庭礫敷SH6603Aの上面から80cm程度に復原できる。

SS18599 (遺構実測図22)

I 期 南 面 築 地 回 廊 足 場 穴

南面築地回廊基壇の南北両側で検出した小穴列。穴の規模は直径30~50cm、深さ20~25cmとばらつきがある。また検出状況も断片的であるが、北側では約2.8m間隔で3基の穴が並ぶ様子が確認できることから、基壇の外側に沿って設けられた小柱穴列の一部とみることができ。このうち南側の穴は南側雨落溝SD18596Aに掘り込まれ、また北側の穴は北側雨落溝SD18595Bに掘り込まれ、SD18595Aとの重複関係は認められないことから、築地回廊建設時の足場穴である可能性が高い。

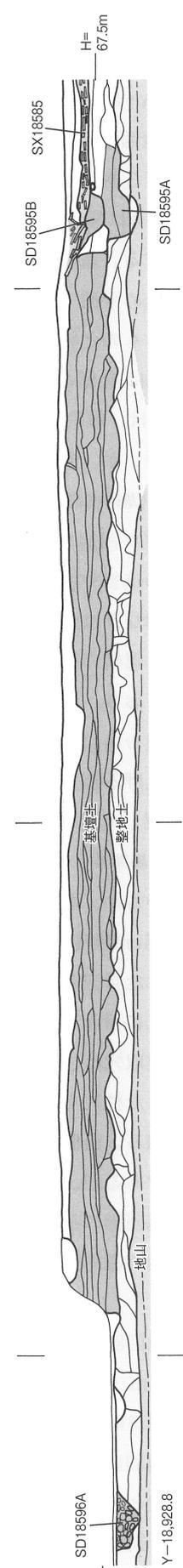
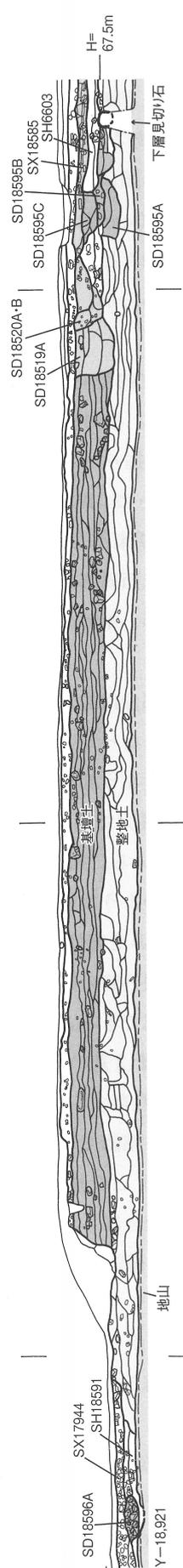
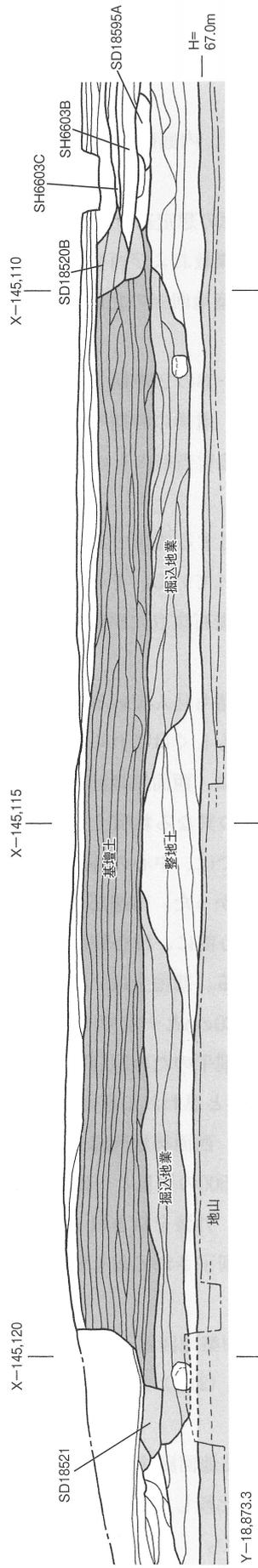


图 27 南面築地回廊 SC7820 基壇断面图 1 : 60

SD18595A・SD18596A (遺構実測図22、図版23、図27)

I 期 南 面
築 地 回 廊
雨 落 溝

南面築地回廊西半SC7820の雨落溝である。SD18595は北雨落溝で、内庭礫敷SH6603の改修と対応して3時期が確認でき、下層から順にA、B、Cとする。

SD18595Aは幅約50cm、深さ約15~30cmで、溝心が南面築地回廊の想定基壇縁から約1.2m北に位置する。基壇外装抜取溝SD18520Aと同様に中層礫敷、上層礫敷および西楼の基壇土に覆われるため平面での検出は部分的であるが、断面観察により南面築地回廊の北側基壇縁全体に残存するものと判断できる。

SD18596は南側の雨落溝で、朝堂院内庭の礫敷に対応してA・Bの2時期を確認した。SD18596Aは、幅約37cm、深さ約8cm。検出範囲が限られるため、遺構の時期や広がりには明らかではないが、朝堂院広場SH18591を掘り込んでいることから、造営当初のものとして判断した。

SC13400 (遺構実測図2・6・11・20・21・22、図版25・26、図15)

I 期 西 面
築 地 回 廊

大極殿院の西側を限る築地回廊。I期東面築地回廊SC5500に対応する遺構である。遺構上面は後世の造替や削平が著しく、とくに西縁部分は全体的に削平されている。そのため基壇縁や西雨落溝などは破壊されているものの、築地の基底部分や側柱の礎石抜取穴が部分的に残存しており、遺構の存在が確認できる。

前述のとおり、西面築地回廊の北半部分は造営前の地形が著しく落ち込んでいるため、回廊基壇土を積む前に2m以上の造成をおこなっている。基壇土は地山もしくはこれら整地土の直上に積み上げる部分と、掘込地業をとまなう部分がある。掘込地業は、西面築地回廊中央部分のみで確認した。幅12~13m、深さは最大で65cm残存する。色調の異なる粘質土を交互に7層前後(各層厚さ5~10cm)積み上げている。東面築地回廊SC5500では、中心の幅約3mを掘り残しているが、西面築地回廊ではそのような施工状況はみられなかった。南端部分では、基壇縁に幅15cm程度の浅い溝状の落ち込みを確認した。基壇土を積む前に、積む範囲を示すために掘られた目安の溝か、もしくは基壇外装の抜取痕跡と考えられる。基壇土は、砂質土と粘質土を交互に積み上げる版築の層が確認できる。各層の厚さは5~20cmと一定ではない。

側柱の抜取穴は、南隅部分の東側柱列を2基のみ検出したが、他は削平のため確認できなかった。確認した柱穴も、深さ10cm程度が残存するのみであるが、根石と思われる直径15~29cmの丸石が残る。西側柱列は削平のため、確認できなかった。柱間は、西面築地回廊では1間のみの検出であるが、桁行約4.5m(15.5尺)となり、東面築地回廊SC5500の知見と一致する。

西面築地回廊の基壇外装は、すべて抜き取られており残存しない。外装を抜き取った痕跡も、南端の東辺で幅約1.4m、深さ約40cmを確認している以外はすべて削平されており確認できなかった。

西面築地回廊の規模は、検出した遺構からの復原は難しいが、東面築地回廊SC5500と同じく、基壇幅10.8m(36尺)、側柱桁行柱間寸法4.5m(15.5尺)、梁行寸法7.1m(24尺)としてよいだろう。

SS18211 (遺構実測図20、図版26)

I 期 西 面
築 地 回 廊
足 場 穴

西面築地回廊想定心から西に2.3mの位置で南北に並ぶ小穴列。築地回廊建設もしくは解体時の足場穴とみられる。東面築地回廊で検出されている足場穴列と比較して、柱間寸法も一定しない。I期の遺構である確証はないが、この時期のものとしておく。

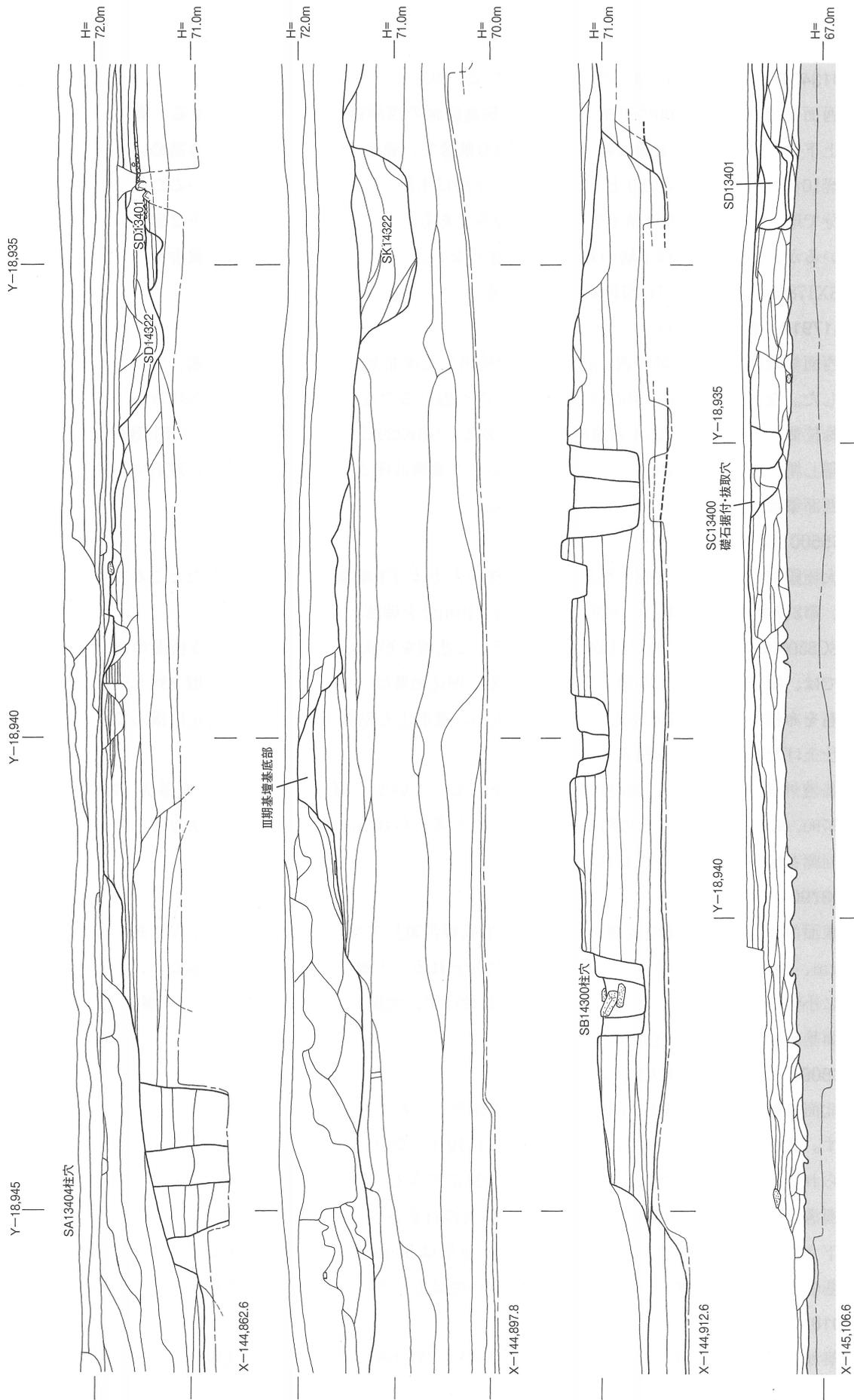


图 28 SC13400・SA13404・SC14280 基壇断面图 1:60

SD13401 (遺構実測図6・20・21・22、図版27・28、図28)

I 期 西 面
築 地 回 廊
東 雨 落 溝

西面築地回廊SC13400の東雨落溝。東面築地回廊の西雨落溝SD3790に対応する。溝の護岸は上下2層に分かれ、上層は幅50~70cmの石敷溝で、底に4~5cmの石を敷き詰め、東岸に直径10cm程度の石を見切りとして並べる。下層は上層に大部分を破壊されているため、南端部分で厚さ5~15cmの堆積土を確認したのみである。対応するSD3790でも上下2層を確認しているが、SD13401では下層の残存状態は良くない。見切り石列より東には、殿舎地区では礫敷SX17865が、内庭部ではSH6603Aが広がる。

SA17912 (遺構実測図6)

目 隠 し 堀

西面築地回廊西側柱筋の西3.3mの位置で検出した南北堀。径80cmの柱穴6基、5間分を検出した。全長は11.82m。回廊からの距離、西へ振れる点など共通点が多くみられるため、東対称位置のSA8229に対応する遺構と考えられる。SA8229は東面築地回廊に開く穴門SB8233の目隠し堀とされ、SA17912も同じ性格とすると、遺構は確認していないがこれに対応する穴門が西面築地回廊にも開いていたと考えられる。

SC5500 (遺構実測図3・16)

I 期 東 面
築 地 回 廊

大極殿院の東を限る複廊の築地回廊。遺構の大半は『平城報告XI』で報告したところであるが、第217次東調査で新たに未検出部分の南北10m分を確認した。

SC5500は、北側の丘陵部は地山を造りだして基壇を形成し、地山が低くなる低湿の南半部分では、掘込地業を施し基壇土を積み上げる。掘込地業は、中心の約3m幅を掘り残し、その左右を布掘りする。掘込地業の深さは約30cm。礫混土と粘質土を3~4層交互に積んで水平に仕上げた後、基壇土を積み上げる。

基壇外装抜取痕跡や、側柱の痕跡は確認していないが、掘込地業の外側に雨落溝(西側:SD3790、東側:SD5575)、その間に基壇があったと考えられる。基壇幅や柱間寸法などは南面築地回廊と同様であったと思われる。

SD3790 (遺構実測図16)

I 期 東 面
築 地 回 廊
西 雨 落 溝

東面築地回廊SC5500の西側の雨落溝。『平城報告XI』ですでに報告したところである。幅90cm、深さ15cmの礫敷の溝で、上下2層に分かれる。上層は見切り石列をともない、その内外に小振りの礫を敷く。下層は見切り石列を設けず、大振りの礫を内外に敷く。下層の溝は、東面築地回廊SC5500の足場穴を覆っている。

SC8098・SD130 (遺構実測図2・3)

I 期 北 面
築 地 回 廊
南 雨 落 溝

北面築地回廊SC8098は、『平城報告XI』で報告したところであるが、改めてその検出状況を記す。北面築地回廊は、礎石痕跡や築地などは残存しない。しかし、北面築地回廊南雨落溝とみられる石敷の溝SD130によってその存在が想定できる。SD130は、全長185m、幅約80cmの東西溝で、南肩に他の回廊雨落溝を同じく拳大の石を並べ回廊内側の礫敷の見切り石とする。上下2層あり、上層は直径10cm前後の石を、下層は5cm弱の石を底石とする。溝の北肩および基壇外装の抜取痕跡は削平されている。溝の幅はもっとも残りの良いところで60cmである。

SD18300 (遺構実測図2)

築地回廊の北西入隅部分に位置し、南雨落溝SD130の西延長上で西面築地回廊を貫く東西溝。断面は上面幅75cm、底面幅30cmの逆台形を呈する。I-3期の西面掘立柱堀SA13404と重複し、

SA13404最北の柱穴がこれを壊している。東の対称位置には約12mの木樋暗渠が残り、他に暗渠の抜取とみられる痕跡があることから、SD18300も東側と同様に回廊基壇を貫く暗渠が存在したと考えられる。

SD17961A・SD17963A（遺構実測図22、図版30、図38）

SD17961Aは南面築地回廊と西面築地回廊が接続する回廊南西隅部分より南北方向に、SD17963Aは入隅部より約3.3m北で東西方向に回廊基壇の下を貫く暗渠。いずれもI-4期に同位置に造られる木樋暗渠SD17961B・SD17963Bに掘り込まれるが、その下層に部分的に暗渠の裏込め土とみられる灰色粘土が認められる。暗渠そのものは残存しないが、掘方の形状より木樋であったと思われる。断面観察より、暗渠は回廊基壇土の下の整地土を掘り込んで設置し、その後基壇土を上積み上げていったことがわかる。

③区画外の遺構

SD3825A（遺構実測図4・5・18・19、図版48・49、図29）

平城宮造営時に第一次大極殿院の西に設けられた南北溝。西面築地回廊基壇辺の約37m西に位置し、北から南へ流れる。途中未発掘部分を含め南北約160m分を確認した。北は、後述する園池SG8190の前身の池か、もしくは谷筋のような地形から水を引き込んでいたと思われる。第一次大極殿院東の基幹排水路SD3715に対応する西側の基幹排水路と考えられ、南は平城宮の南辺まで続くものと思われる。遺構を確認した範囲では、溝幅は最大で1.8mが残存するが、後のSD3825B・Cにより上部を破壊されている。

基幹排水路

SD3825は、場所により検出の状況が異なるため、SD3825A～Cの対応関係は、埋土の状況と出土遺物より求めた。SD3825Aは第92・315・316次調査では灰色砂もしくは灰白色砂、第28次調査では灰褐色砂質土となり、和銅6年(713)の紀年木簡のほか、瓦などが出土している。

なお、SD3825Aの北部は、SG8190の造成にともないI-2期に埋め立てられ、SD3825Bに造り替えられる。

SD12966A（遺構実測図4、図版50、図34）

SD3825Aに西から流れる東西溝。幅約1m、深さ約0.2m。埋土に瓦を含む。

SD12968（遺構実測図4、図版50、図34）

SD12966Aの約3.6m北に掘られた幅1.6m、深さ30cmの東西溝。平城宮瓦編年第I-2期の軒瓦6665Aが底面に貼りついた状態で出土した。SD12968はSX18255Aの造営時に埋め立てられる。

SH18591（遺構実測図22・23・24、図版56、図27）

大極殿院南面築地回廊の南に広がる朝堂院広場。暗茶褐色粘質土の上に直径5～10cmの小礫を敷き詰める。南門の南面階段の前面にも直径3cm前後の小礫を敷き詰めた面を確認しており、南面階段地覆抜取痕跡と北辺が平行することから、同時期のものであろう。南への広がり、南門付近で約2.4mを確認したのみだが、おそらく朝堂院広場全体に礫が敷かれていたと考えられる。

朝堂院広場

ii I-2期の遺構

南面築地回廊は南門の東西に楼閣建築を増築し、南面築地回廊周辺の礫敷を改める。西区画

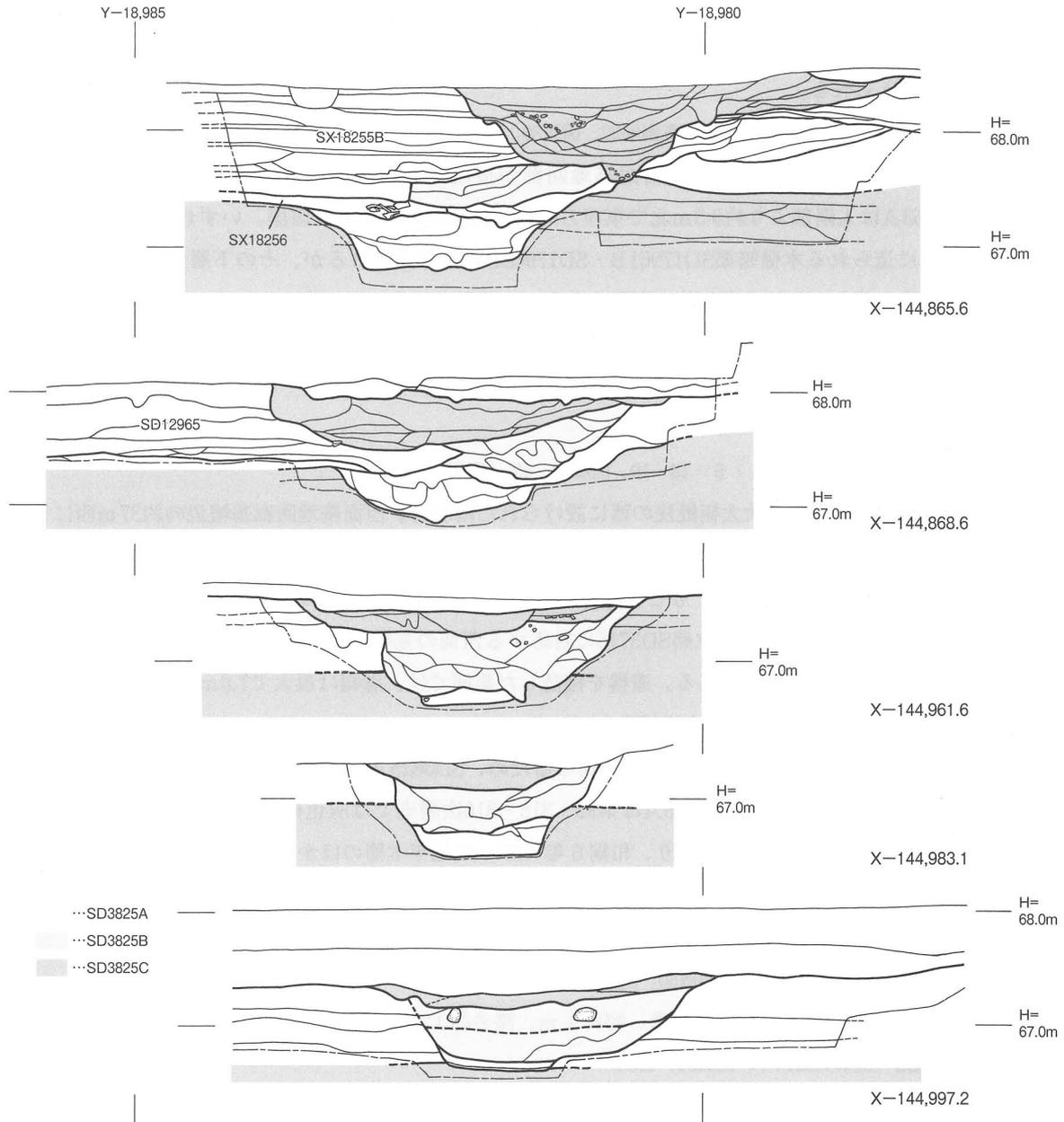


図29 SD3825 断面図 1:60

外は再度整地を施し、北側に池を造成し、基幹排水路の取水口を設ける。

①区画内の遺構

SH6603B・SX18600 (遺構実測図22・23・24、図版18、図27・30)

内庭広場
(中層礫敷)

SH6603Bは、東西楼増築にともなう南面築地回廊の改修に合わせ、南面築地回廊周辺にのみ敷かれた礫敷(中層礫敷)。下層礫敷SH6603Aの上に灰褐色～茶褐色粘質土を積み、その上に径2～5cmの礫を敷く。積土は西楼の北側では約20cmであるが、それより西の南面築地回廊北側では約15cmとやや薄くなり、SH6603B上面の標高も、西楼北側では67.7～67.8m付近であるが、それより西側では67.5m付近と低くなる。後述のように東西楼の北側に雨落溝が

つくられていないこと、南面築地回廊の北側に東西溝SD5590Aが通ることを併せると、この時期にはSD5590Aへ水が流れるように西楼付近の標高を高くしたと考えられる。

西楼より西側の南面築地回廊では、南面築地回廊基壇外装抜取溝SD18519Bの北約1.7mの位置に見切り石列SX18600を検出している。SH6603Bはこれより北に敷かれたことがわかる。

②区画施設

SB7801B・SX18205（遺構実測図24、図版19、図24）

中層礫敷SH6603Bの敷設にとともに、南門は雨落溝の改修と階段の

付け替えをおこなっている（SB7801B）。北面は雨落溝自体は検出されていないが、中層礫敷の上面に幅80～100cmの凝灰岩粉を多量に含む深さ5cm程度の土層SX18205があり、基壇地覆石の外側を巡る敷石のようなものの痕跡と考えられる。SX18205はI-4期の雨落溝の直下にあることから、いわゆる散水状に敷かれた可能性があるが、改修時に捨てられた基壇羽目石の可能性も残る。この凝灰岩粉の土層は北面階段の北側にもあり、北面階段がこの時期に改修された根拠としたが、階段自体の痕跡はない。階段の規模は造営当初の北面階段を踏襲したとすると、幅15.4m、階段の出1.1mとなる。

南面階段は、朝堂院広場の礫敷SX18591の北辺から約1mの位置で、ほぼ直線状に並ぶ凝灰岩片を検出した。凝灰岩片は風化が激しく、もっとも残りの良いもので20×30cm程度しかないが、階段の地覆石の痕跡と考えられる。断面観察より、この地覆石はSX18591上の橙褐色粘質土の積土を掘り込んで据え付けていることがわかる。この時の改修で、南面階段の出は、約1.3m南に拡張された。なお、南面階段改修の時期は、I-4期に降る可能性もある。

SB18500（遺構実測図23、図版20・21、図31・32）

大極殿院の南門SB7801の西側、南面築地回廊SC7820の北側に取りついて建つ総柱建物。桁行5間、梁行3間の東西棟建物で、側柱のみを掘立柱とし、その他の柱は礎石建とする。南門東側のSB7802と対応し、ほぼ同じ構造を採る。これらは南門の東西の南面築地回廊に増築された楼閣建築で、SB7802を東楼、SB18500を西楼とする。

掘立柱は基本的に東西に長大な抜取穴を有しており、直径が大きい柱を使用していたようである。抜取穴は一方の先が細くなる茄子状の長円形を呈し、南北幅が3.5m程度であるのに対して東西幅は6～9mにおよび、隣の抜取穴と連結している。抜取穴は、東半の柱は東側に、西半の柱は西側に長くなっており、それぞれ建物の外側に向けて柱を抜き取ったとみられる。深さは2.4～3mで漏斗状を呈しており、底辺では幅が70～90cmとなる。この大きさは東

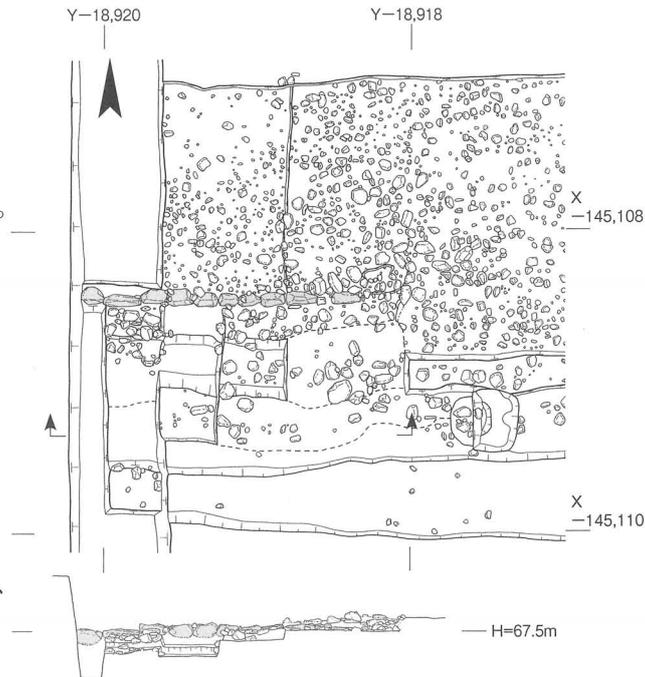


図30 SX18600 見切り石列 1:50

南門階段の
付け替え

楼閣建築
(西楼)

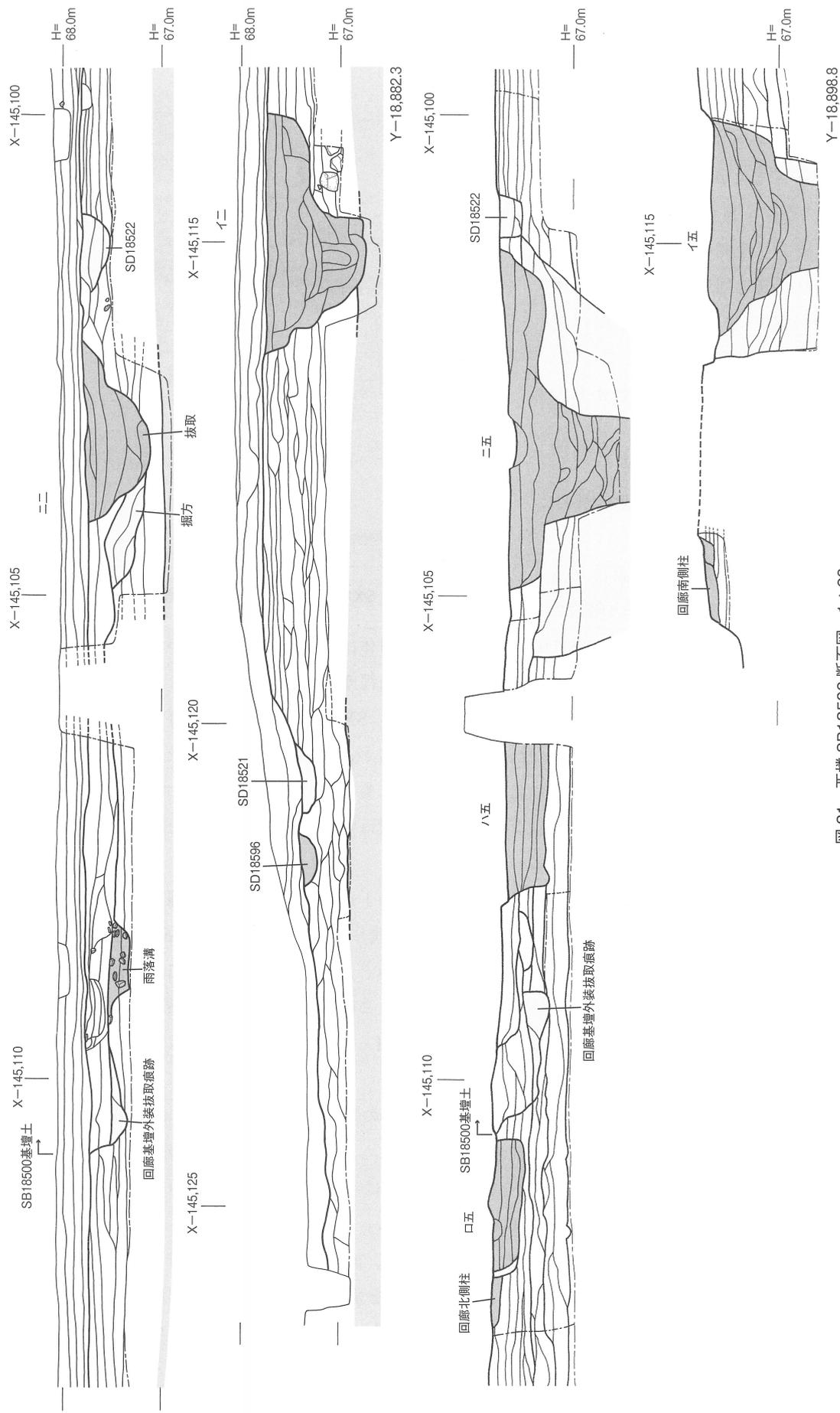


图 31 西樓 SB18500 断面图 1 : 60

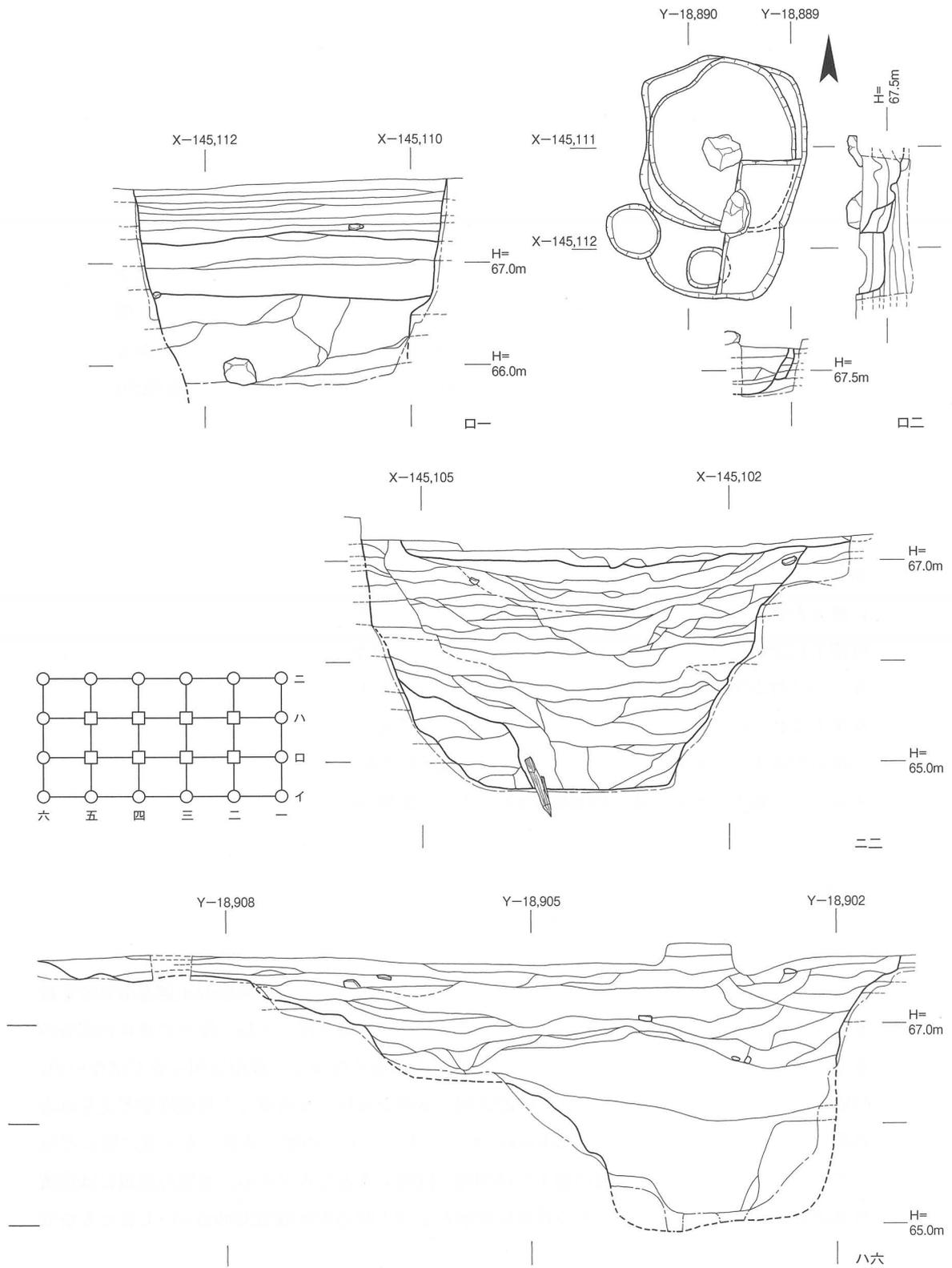


图 32 西楼 SB18500 柱穴平面・断面图 1:60

楼SB7802から出土した掘立柱根の柱径約75cmと近似することから、ほぼそのまま柱位置を示すものと思われる。柱掘方は、上半分は抜取穴によって破壊されるが、下半分が残存する。柱掘方の規模は一辺2.5～3mの長方形であり、東西に長いものや南北に長いものがあるが一様ではない。内部の柱の礎石はすべて抜き取られており、ハ列では抜取穴が大きく据付穴をとどめないが、ロ列では比較的良好な状態で据付穴を確認できる。残存する据付穴は一辺約1.5mの方形あるいは一辺1.4～2mの長方形を呈し、深さは約40cmである。イ列の抜取穴は不整形な円状を呈し、底部で直径0.8m～1.6m、深さは16～48cmである。一方、ロ列の抜取穴は一辺1.7～2mの方形で、深さは37～56cm。

掘立柱の抜取穴の埋土は、下半は単位が厚く、その上から細くなる傾向が確認できる。上半の細かい土層には木製品や木簡を多量に含むものがあり、最初に半分程を一気に埋め立てた後、廃棄土坑としても使いつつ徐々に埋めていった様子がうかがえる。またニ二およびイーの抜取穴では、穴底に杭が突き刺さった状態で残存していた。杭の直径はいずれも約10cmであり、ニ二では長さ60～70cmの杭を2本、イーでは長さ約1.5mの杭を3本組み合わせ、柱の推定位置に沿うように設けていることから、柱を抜き取る際に用いたものであろう。

ローの柱穴は他の柱穴と様相を異にする。ローは側柱の一つであるが長大な抜取穴が存在せず、一辺約3.5mの方形の据付穴状を呈する。ローの柱掘方内の埋土は大きく3層に分かれており、下層が掘立柱抜取穴に似て一気に埋め立てた様相を示すのに対し、中層では埋土を水平に整えた様子がみられ、上層では厚さ5～10cmの単位で埋土を版築状に積み重ねており、基壇積土に近い様相を示す。下層からは人頭大の石や長さ40cm程度の杭状の木材が出土しており、ニ二およびイーの柱抜取穴の状況と共通する。また上層の上面には根石状に拳大の礫が散在することから、ローについては当初掘立柱であったものがある時期に礎石建に改修したことが推定できる。なお東楼SB7802でも東側柱の北から2本目の柱穴がローと類似した様相を呈することが報告されている（『平城報告XI』）。ここでは掘立柱の掘方を基壇積土と似た版築で埋め戻していることから結果的に柱を立てなかったと結論しているが、ローのように掘立柱から礎石建に改修された可能性も十分に考えられよう。

西楼は南側柱列（イ列）が南面築地回廊の築地と、その北側のロ列が南面築地回廊の北側柱列と重複している。南面築地回廊の北側に基壇を増築していることが確認でき、大極殿院の創建当初には東西の楼閣がなかったことは明らかである。西楼の基壇は回廊の北側基壇外装を抜き取って基壇北縁に沿った幅70cm～1mの範囲に基壇を積み足した後、改めて残りの部分の基壇を積み足している。このように2段階に分けて基壇を増築した理由は明らかではないが、回廊基壇の解体時の応急措置として、回廊北縁の基壇を先行して造成した可能性が考えられる。西楼の基壇積土は下層の内庭礫敷SH6603Aの上にややしまりの悪い粘質土を一気に積んだもので、版築状を呈する回廊基壇の積土とは明瞭に区別できるものである。基壇の周辺には基壇外装抜取痕跡SD18522が巡り、その外側に中層および上層の内庭礫敷SH6603B・Cをとともなう。したがって、西楼の建設に併せて内底部に中層礫敷SH6603Bを施す改修がなされ、西楼の存続中にさらに内庭部が礫敷SH6603Cに改修されたことがわかる。なお西楼の基壇周囲には雨落溝は確認していない。

上記の遺構から想定される基壇の規模は増築部分で東西約27.6m（93.5尺）、南北約8.9m（30尺）

である。柱間寸法は梁行約4.6m (15.5尺) 等間、梁行約3.8m (13尺) 等間であり、基壇の出は約2.4m (8尺)となる。基壇の高さは回廊の基壇に増築していることを踏まえれば、回廊と同じであったと考えられる。

SD18522 (遺構実測図23)

西楼SB18500の基壇外側をコの字に巡る素掘りの溝。SB18500の基壇外装の抜取痕跡とみられる。深さが20~30cm、幅が30~80cmと出入りがある溝で、とくに東西の溝はSB18500の抜取穴に大きく壊されている。

西楼基壇外装
抜取痕跡

SD18595 B (遺構実測図22、図版23、図27)

南面築地回廊の基壇外装は、東西楼の増築にともない改修がおこなわれている。楼閣を増築した部分は基壇外装を取り外し、基壇土が継ぎ足され、楼閣以外の場所では、楼閣の外装と合わせて施工しなおしたことがわかる。

南面築地回廊の改修

またこれにともない、下層の北雨落溝SD18595 Aが埋め立てられ、新たに雨落溝SD18595 Bが造られる。この溝は、中層礫敷にともなう見切り石列SX18600に並行し、SD18595 Aや、I-4期の北雨落溝SD18595 C (後述) よりも約50cm北側に位置する。

③区画外の遺構

SA17951 (遺構実測図22、図版56)

中央区朝堂院地区を画する塀で、第一次大極殿院南面築地回廊西南隅に接続する北面掘立柱塀。東側の掘立柱塀SA5551 Aに対応する。柱穴2基 (柱間約3.2m) を検出した。柱穴の掘方は隅丸方形で、一辺1.5m。調査区の西に続き、南に折れ朝堂院の西を画する塀に接続するのだろう。

朝堂院北面掘立柱塀

SX12971 (図34)

SD12965のやや北側の地山上面で検出した幅約3.9m、深さ0.5m以上の土坑状遺構。SX12971はY-19,000.5付近の断面調査でのみ確認した。埋土は黒灰色粘質土。それより東側では確認できないことから、溝ではなく土坑状の遺構と考えられる。埋土には年代を示す遺物は含まれないが、木屑を含むことからI-2期の遺構とした。

SX18257 A (遺構実測図5、図版53、図33)

西区画外、X-144,874.5付近に設けられた東西方向の暗渠。溝幅は約90cm、底部は平坦で断面は台形を呈する。断面形状からは切石組の暗渠が据えられていたと考えられるが、石材は残存していない。埋土に多量の瓦を含む。I-2期の整地土上面から掘り込み、II期の整地土で覆われている。

SG8190・SX18255 A (遺構実測図4・5、図版48、図34・35)

SG8190は、SD3825 Aの北部を埋め立て、大極殿院北西に造成された園池遺構。池の東南隅部の岸と、南北溝SD3825 Bへの取水口を確認した。

園池遺構

SG8190については、今回の報告対象区の北 (平城第101次調査、「佐紀池の調査 (101次)」『平城概報昭和51年度』) で、西岸・東岸・北岸の一部を検出しており、その護岸の様子が確認されている。それによると、西岸はほぼ南北に通るが、東岸は現在の佐紀池の地形に近い形状で、岸は傾斜約10%の緩やかな斜面となり、拳大の礫を幅2mほど敷いている。南岸では、このような護岸の様子は確認されず、堤SX18255 Aを築き、SD3825 Aを埋め立てた位置からやや東にSD3825 Bへの取水口を開く。

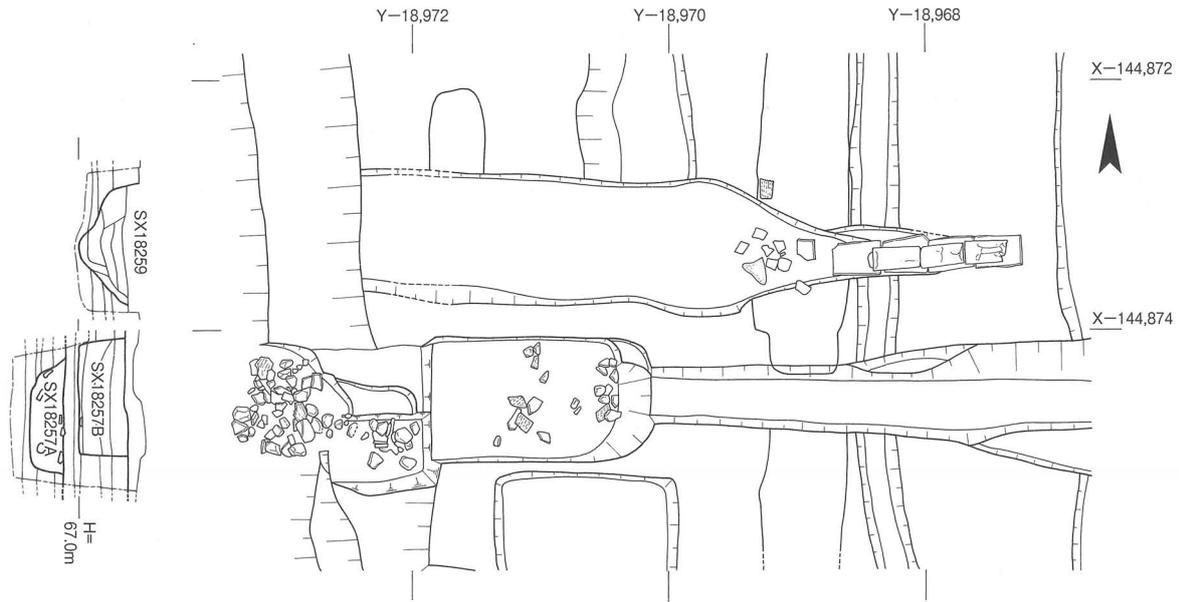


図33 石組暗渠 SX18257・SD18259 1:60

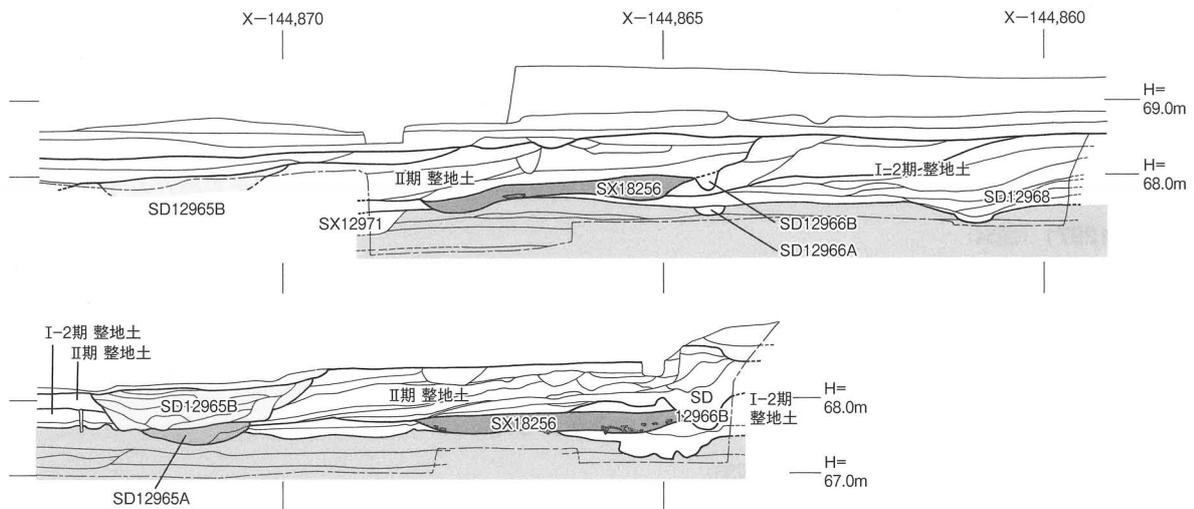


図34 SG8190南岸断面図 1:100

堤 SX18255Aは東西方向に積土をして築いた堤で、SD12966Aを埋め立てたうえに、黒褐色粘土で約50cmのかさ上げをする。整地の最下層には造営にともなう木屑が大量に含まれ、養老6年(722)の木簡が出土した。

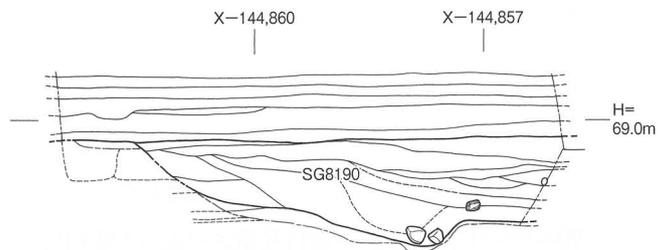


図35 SG8190断面図 1:100

SD3825Aの存在より、南堤が造営される以前には、おそらく前身となる園池遺構があったと考えられる。また、第101次調査では、池の堆積土の中より9世紀前半の土師器が出土しており、SD3825の廃絶以後、平城上皇の時代にも存続していたようである。

SD3825B (遺構実測図4・5・18・19、図版48・49、図29)

SG8190の南東隅の岸に、SD3825Aから東に約70cmずらして取水口を造り、SD3825Aの上部を流れる基幹排水路。溝底は、取水口付近でSD3825Aよりも約60cmほど高い。西肩は、後の南堤SG8190の改修時に破壊されており、判然としない。埋土は暗褐色粘土で、平城宮土器Ⅳの土器が出土している。

SD3825Bは、Ⅰ-2期からⅡ期の造営までの間存続していたと考えられる。

SD12965A (遺構実測図4、図版52、図34)

SX18255Aの南を流れる東西溝。西から東に流れ、SD3825Bに注ぐ。最下層の礫混暗灰色砂質土から平城宮土器Ⅱの土器のほか、神亀3年(726)の木簡が出土した。

SX18256 (遺構実測図4、図版51、図34)

SX18255Aの南に沿って東西に広がる瓦敷込層。SX18255Aの上面を覆い、出土した瓦には大極殿院所用瓦を中心とした平城宮瓦編年第Ⅰ-1期の瓦や、瓦編年第Ⅱ-2期の6269Aが含まれる。上面は平坦ではなく、瓦敷面として露出していなかったと思われる。

SD3715 (遺構実測図3、図版55)

第一次大極殿院と内裏の間を流れる南北溝で、平城宮の基幹排水路の一つである。これまでの調査で、北は推定大膳職地区の北端から、南は平城宮南面大垣の南、二条大路北側溝に至ることが確認されている。遺構の概要についてはすでに『平城報告Ⅳ・Ⅺ・ⅩⅢ』で報告されている(『平城報告Ⅳ』ではSD572として報告している)が、第170次調査で未発掘部分の南北約10m分を確認したため、併せて報告する。

SD3715は幅2~6mの素掘りの溝で、深さは約2m。東面築地回廊心より東に約36.5mを北から南に流れる。兵部省西側では埋土の状況から3時期の変遷を確認したが、第一次大極殿院周辺では2~3層に区分できるものの、遺物の逆転がみられるため、遺物を含めた時期区分は困難である。遺構全体を通して、氾濫と浚渫が繰り返されたようである。開削の時期は、靈龜元年(715)の紀年木簡が出土した土坑SK5535の東半を掘り込んでいることから靈龜年間(715~717)頃とみられるが、遷都当初の和銅年間(708~715)に遡り得るといふ異論も提示されている³⁾。一方下限は、上層の埋土に平安時代初頭の土器が含まれていることから、Ⅲ期まで溝として機能していたと考えられる。

第170次調査では、溝の埋土は大きく2層に分層できるが、上層は水流のためか細分できない。上面より深さ3~4cmで鎌倉時代の土器が出土しているが、後世の混入とみられる。下層の埋土は礫混灰色砂質土で、瓦・土器が多量に含まれる。

SD3715には、Ⅰ期では大極殿院からの排水路が接続し、Ⅱ期には推定大膳職南面築地北雨落溝を延長した溝SD573が合流する。

iii I-3期の遺構

恭仁京へ遷都する時期。大極殿と東面・西面築地回廊は解体され、恭仁宮に移築される。東面・西面の区画施設には、新たに掘立柱塀が造られる。

SA13404 (遺構実測図2・6・11・20・21・22、図版25・26・29、図36)

西面築地回廊SC13400の西側柱筋と柱筋を揃える掘立柱の南北塀。東面における掘立柱塀

西面掘
立柱塀

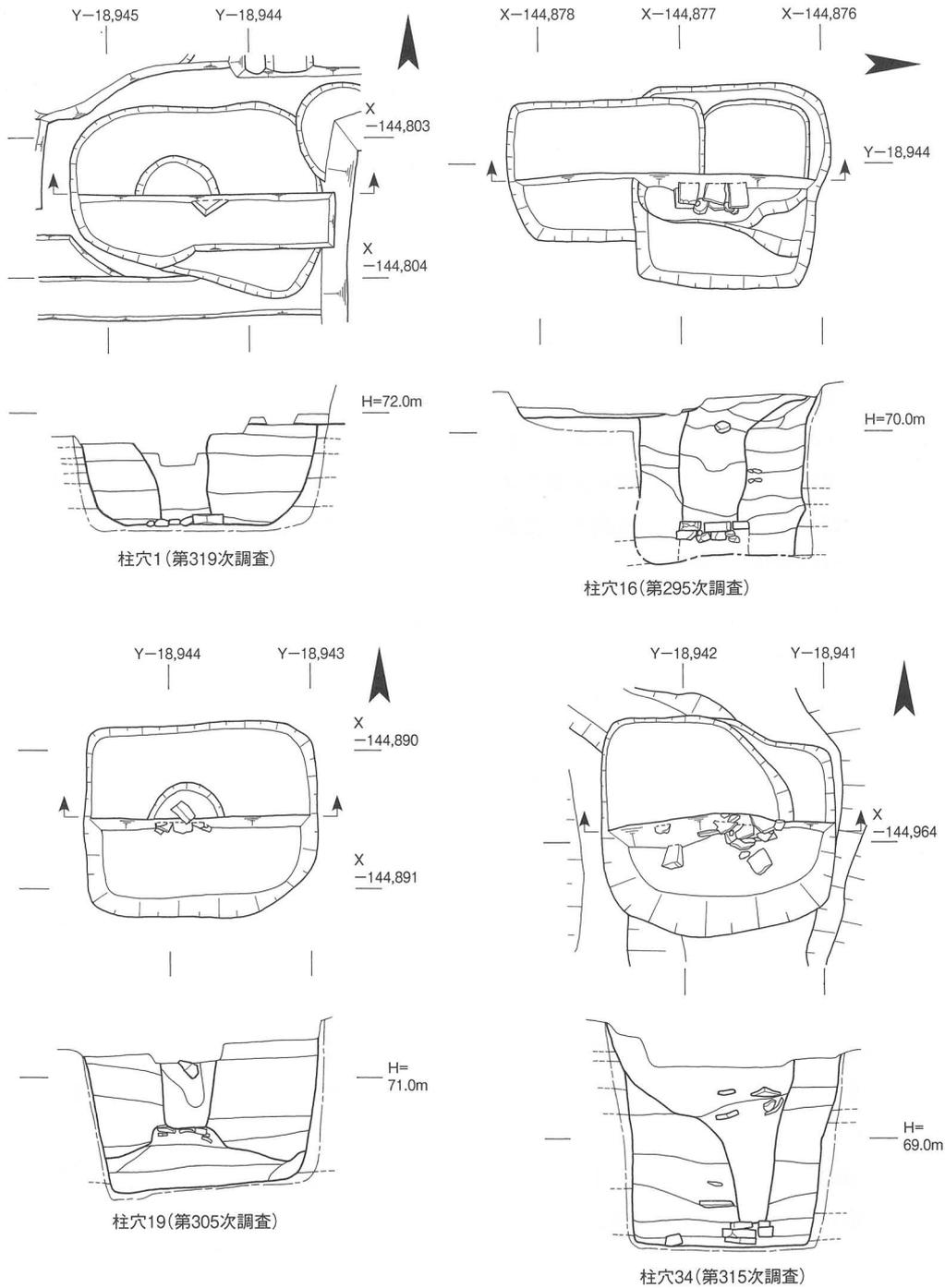


図 36 掘立柱塼 SA13404 柱穴 1 : 50

SA3777に対応する。未発掘部分があるが、SA3777と同じく総柱間は65間（約305m）で、柱間寸法は4.56m（15.5尺）となる。北から15・16番目の間は2間分（9.15m）あける点も同じくする。また、北から50・51番目の柱穴がなく、3間分開く門があったと考えるが、SA3777では対応する位置で柱穴を確認しており、開口部はない。

柱の掘方は東西にやや長い長方形で、長辺1.3～1.9m、短辺1.2～1.6m。柱穴の一部は径40～60cmの柱痕跡をもつ。柱根は残存しないが、柱の下に磚を敷いて礎盤としていた。柱穴によっ

ては、磚の上下に瓦を楔状に入れて高さを調節するものもある。SA3777ではこのような地業をおこなっておらず、第一次大極殿院地区の西辺は、東辺に比べ地盤が軟弱であったためと考えられる。

SK14301・SK14316 (遺構実測図11)

西面築地回廊基壇外装に用いた凝灰岩の切石や、瓦などの廃材を投棄した土坑。いずれも大量の瓦を含む。出土する瓦は平城宮瓦編年第Ⅰ期前半に属しており、Ⅰ期西面築地回廊の所用瓦であろう。

SA3777 (遺構実測図16)

東面築地回廊SC5500の東柱筋に重なる掘立柱の南北塀。総柱間は65間(約306.2m)で、柱間寸法は4.57m(15.5尺)。北から15・16番目の柱間と、32・33番目の柱間は2間分(それぞれ9.15m、9.10m)開き、門があったとみられる。『平城報告Ⅺ』段階では全66基の柱穴のうち60基を検出しており、その後、北から5番目の柱穴を第170次調査で検出した。

東面掘
立柱塀

柱穴は、正方形もしくは東西がやや長い長方形で、長辺1.0～1.8m、短辺0.9～1.4m。直径40～47cmの柱根が残存する柱穴が7基ある。礎盤などは用いられていない。

SB13405 (遺構実測図21)

SA13404の西で検出した掘立柱建物。桁行3間、梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法はいずれも2.1m(7尺)。柱穴は円形で直径40～60cm程度。Ⅲ期のSB13412によって柱穴を破壊されており、SA13404の開開口部との位置関係よりⅠ-3期の遺構とした。

iv Ⅰ-4期の遺構

①区画内の遺構

SX17866 (遺構実測図6)

SD17862の東で部分的に検出した礫敷面。造営当初の礫敷SX17865を覆う。礫の直径は2～3cm。SB17874の柱穴が掘り込むことから、Ⅱ期の建物を建てる時点では敷かれていたとみられる。SH6603Cに用いられた礫の様相と似ており、両者は同時期に敷かれた可能性があることからこの時期の遺構とした。

壇上の礫敷

SH6603C (遺構実測図22・23・24、図版18、図27)

Ⅰ-4期の内庭広場は、中層礫敷SH6603Bの上面に、灰色～灰茶色の砂質土を5～10cm程度積み、その上に径2cm以下の小礫を敷き詰める(上層礫敷)。南面回廊の北側では、中層礫敷の見切り石より約50cm南に新たに拳大程度の石を並べ、上層礫敷の見切りとしている。

上層礫敷

②区画施設

SB7801C・SD7813B・SD18201・SD18520 (遺構実測図24、図版19、図24)

この時期に、南門は北面の階段を改修している(SB7801C)。北面階段は、基壇の北辺中央部に東西14.2m、南北1.2mの凝灰岩片が堆積する張り出しがあり、それより外側はSH6603Cの小礫が広がる。また、踏石の痕跡を検出しており、この時期の北面階段の出は1.2m(4尺)に改修されたことがわかる。

南門階段
の改修

また、上層礫敷SH6603Cにともない、基壇の北面の雨落溝が改修される。SH6603Cの見切り石の内側に小礫の溝があり、これが南門北雨落溝SD7813Bである。

南門は第一次大極殿院の廃絶時に取り壊され、南門・南面築地回廊ともに基壇外装が取り外され、基壇土も削られる。基壇外装採取痕跡は南門の北面にはSD18201が巡り、南面築地回廊の北側にはSD18520が通る。

南面築地
回廊雨落溝

SD18595C・SD18596B (遺構実測図22、図版23・24、図27)

SH6603Cの敷設にともない、南面築地回廊の北雨落溝SD18595Cを改修する。SH6603Cの見切り石列を北肩として、幅45~70cm、深さ約15cmの東西溝が設けられた。西楼SB18500より西側で検出しているが、西楼と南門SB7801との間では確認していない。

南雨落溝SD18596Bは、幅45~70cm、深さ約15cmの東西溝。西楼の西で10.6m分を検出した。溝内には径5~10cmの川原石が詰まっている。朝堂院Ⅱ期礫敷SX17944に覆われている。

SD13403 (遺構実測図21、図版31、図37)

木樋暗渠

西面築地回廊東雨落溝SD13401を東端とし、回廊基壇を貫く東西方向の暗渠。東面築地回廊のSD3770に対応し、回廊内から外へ排水する機能をもつ。幅80cm程度の掘方に、木樋が1本残存する。木樋は角柱を転用したもので、底面に貫穴と頭貫の痕跡が残る。樹種はコウヤマキ。

西端はSD3850に合流するが、周辺は西面築地回廊基壇中央より西側を後世に大きく削平されており、西がどこまで流れていたかは判然としない。対応するSD3770が東側の基幹排水路SD3715まで木樋をつないで合流していたことを考慮すると、SD13403が西側の基幹排水路SD3825Bまで流れていた可能性もある。SA13404の柱穴との重複関係はないが、SD3770が東面掘立柱塀SA3777の柱穴を掘り込んでいることや、他の木樋暗渠の検出状況から、I-4期の遺構と判断した。

SD17960 (遺構実測図22、図版30・31、図38)

南面築地回廊西南隅部の南、朝堂院内にあり、東から西に流れる暗渠。東対称位置のSD5560に対応する。東端は北から流れるSD17961Bと、東は南面築地回廊南雨落溝SD18596Bと接続し、回廊内部の水と、南面築地回廊南雨落溝の水を朝堂院の外に排水する機能を担って



図37 木樋暗渠 SD13403 1:60

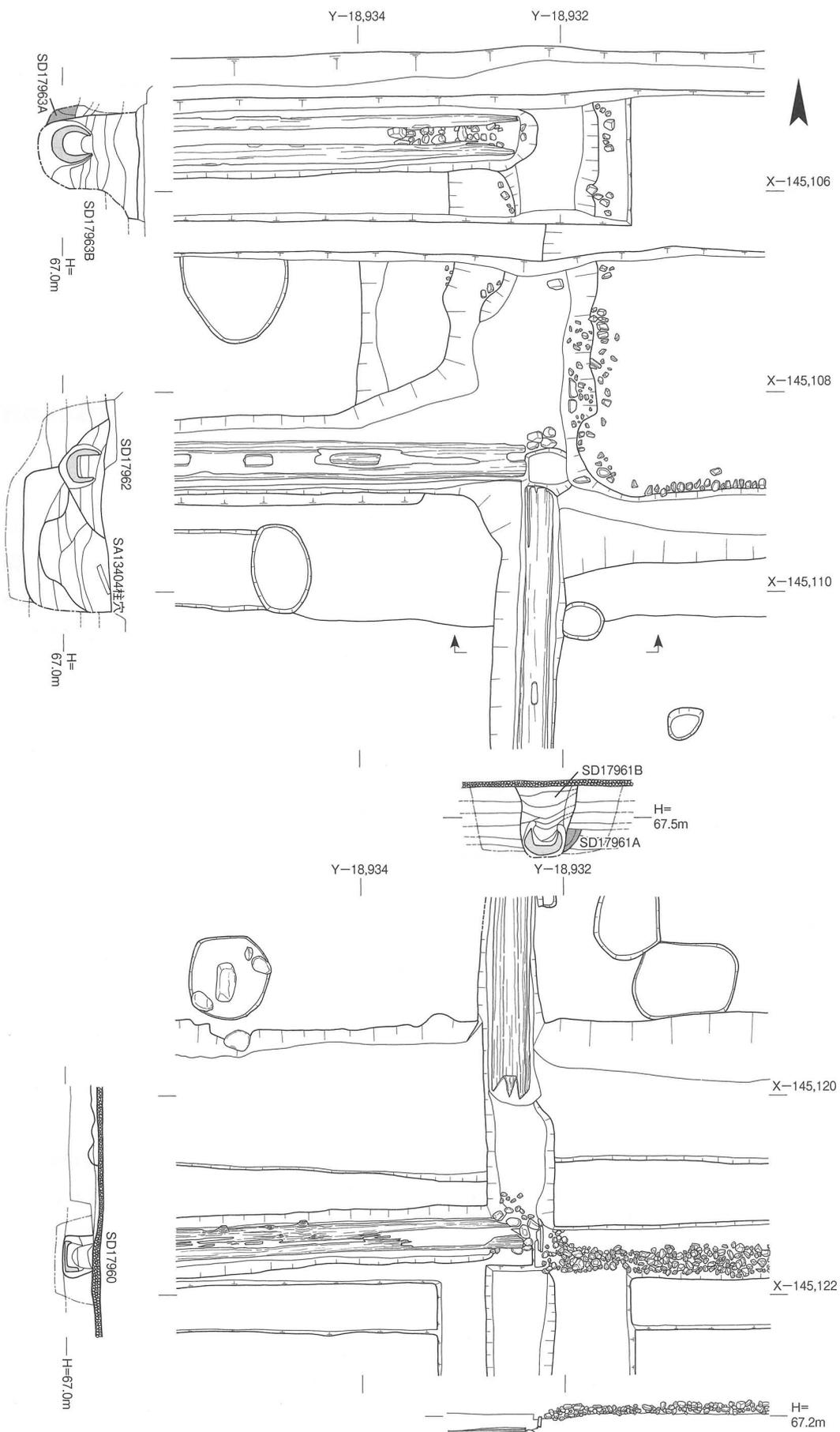


图 38 木樋暗渠 SD17960 ~ SD17963 1 : 60

いる。SD5560が、第一次大極殿院と内裏の間を流れる基幹排水路SD3715に合流しているため、SD17960も第一次大極殿院西の基幹排水路SD3825に合流している可能性がある。

埋土には木樋4本が残存する。木樋は地山を掘り込んで設置され、整地土で覆われている。木樋の断面は矩形である。残存状態は悪い。

SD17961B（遺構実測図22、図版30・31・32、図38）

南面築地回廊西南隅部で回廊基壇を南北に貫く暗渠。I-1期のSD17961Aを改修したもの。南端はSD17960に接続する。断面が矩形の木樋が2本残存する。木樋の据付溝は回廊基壇土上面より掘られ、SD17961Aの堆積土を掘り込んでいる。木樋の樹種はコウヤマキで、長さは北が約6.0m、南が約4.8m、幅はそれぞれ40cm、30cmである。木樋の接合部は、北側の木樋の南端は外側を細く削り、南側の木樋は内側を削り、相欠き状に接合している。SD17960との合流点以南は開渠で南流したとみられるが、それより南の排水については不明である。

SD17962（遺構実測図22、図版30・31・32、図38）

西面築地回廊東雨落溝SD13401と、南面築地回廊北雨落溝SD8595Cが合流する入隅部分から、西面築地回廊基壇を東西に貫く木樋暗渠。東側のSD5562に対応する。木樋据付溝はI-3期掘立柱塀SA13404最南端の柱穴を掘り込んでいる。木樋は3本分を確認した。木樋の長さは東から6.4m、6.7mで、西の一本は調査区外に続く。木樋を据える際に、木樋のまわりを灰色粘土で覆う状況が観察される。

SD17963B（遺構実測図22、図版30・31・32、図38）

SD17963Aを改修した暗渠で、木樋を2本つなぎ、西面築地回廊を貫く。I-3期の西面掘立柱塀SA13404柱抜取穴を掘り込んでいる。基壇土の上面から掘り込み、SD17963Aの木樋を抜き取った後に新たに木樋を据え埋め戻している。また、SD17962と同様に、木樋を据える際に、木樋全体を灰色粘土で包んだ状況を確認できる。

木樋は、円形断面の材の内側をくりぬいたもので、上面に蓋板を置く。木樋は、東側の材は長さ7.3m、径40cm、西側は長さ6.9m、径40cm。樹種はコウヤマキ。東西両端と、材のつなぎ目の部分では木樋の沈下防止のため木樋の下に径15～20cmの川原石を敷いている。また東西両端部では、板状の杭を2本打ち、木樋がずれることを防いでいる。取水口となる東端部分では、木樋の内部にも1mの範囲で直径15～20cmの河原石を詰めている。

基壇より西側の部分では木樋はなく、堆積土の状況より開渠であったと考えられる。

SD14322（遺構実測図6、図版33、図28）

西面築地回廊SC13400の東雨落溝SD13401を掘り込む幅の広い溝状遺構で、南北約40m分を検出した。幅約2.5m、深さ0.7m。断面観察より埋土は3層に分かれるが、磚が含まれ、またII期西面築地回廊東雨落溝SD14290に最上層を掘り込まれているため、SA13404解体時からII期造営までの期間に埋められたと考えられる。

SX18585（遺構実測図22・23、図版33、図27）

西楼SB18500の北辺や、南面築地回廊基壇の北辺に散在する瓦だまり。南面築地回廊北雨落溝SD18595Cを覆う。西楼や南面築地回廊の解体時に不要となった瓦を投棄したものであろう。この瓦だまりは、西楼掘立柱の抜取穴にも掘り込まれていることから、瓦を投棄した後に西楼の柱を抜き取ったことを示している。瓦層の深さは最大約15cm。

③区画外の遺構

SD3850 (遺構実測図20)

西面築地回廊西辺より約8m西で検出した土坑状の南北溝。未調査部分を含め南北約126m分を確認した。東区画外のSD3765とほぼ対称の位置にあるが、SD3765が奈良時代前半の基幹排水路でほぼ一定の幅でまっすぐ流れるのに対し、SD3850は幅が1.5~7.8mと一定ではない。埋土は上下2層に分かれ、下層は灰色砂で藤原宮式・平城宮瓦編年第Ⅰ・Ⅱ期の軒瓦を含み、上層は灰色粘質土で平城宮瓦編年第Ⅳ-Ⅰ期の軒瓦を含む。

重複関係は判然としないが、木樋暗渠SD13402が東から流れ合流しているのでこの時期の遺構とした。埋土に含まれる遺物の年代観から、Ⅱ期後半に廃絶したと考えられる。

C Ⅱ期の遺構

Ⅰ期の区画施設は取り壊され、新たに区画施設を設ける。区画の東西幅はⅠ期を踏襲し、南北幅は北面を南に、南面を北に狭める。区画施設として築地回廊を設け、区画内はⅠ期の磚積擁壁の南を埋め立て土壇を南に広げ石積の擁壁を築く。壇上は多数の殿舎を計画的に建てる。奈良時代後半の称徳天皇西宮に比定される。

①区画内の遺構

SX9230 (遺構実測図12・13・14・15・16、図版34)

Ⅰ期の磚積擁壁を破壊し、土壇を南に広げ、石積の擁壁SX9230を築く。『平城報告Ⅹ』では東端部約8m分について報告した。第217次調査では、基底部の石とその抜取痕跡を新たに約29m分確認し、合計すると東端屈曲部より37m分を検出したこととなる。それより西では遺構は残存していなかった。

石積擁壁

擁壁に用いられたとみられる石は人頭大の安山岩で、最下段の一段分のみが残存する。残存する石列と抜取痕跡の状況から、石積擁壁はⅠ期の磚積擁壁とは異なり、全体は東西約132mの直線状となり、両端でほぼ直角に南に折れ、Ⅰ期の磚積擁壁の斜路(SF9232A・SF14255A)を踏襲した斜路SF9232B・SF14255Bに接続する。

SF9232B・SF14255B (遺構実測図12・16)

SF9232Bは、石積擁壁SX9230の東端より南に下る斜路。Ⅰ期のSF9232Aの規模を踏襲する。Ⅰ期の磚積擁壁はほとんど抜き取られ、土坡のような状態だったと考えられるが、少量ながら磚が遊離した状態で出土している。

斜路

SF14255BはSF9232Bに対応する西側の斜路。同じくⅠ期のSF14255Aを踏襲する。南端では下3段分が残存しているが、それより北では抜取痕跡のみを確認した。残存する磚の上面は著しく風化しており、Ⅱ期以降のある時期には露出していたようである。

SD14292 (遺構実測図6・11、図版39)

SX17866を掘り込む南北溝。幅約50cmの素掘溝で、南北約45m分を確認し、北は調査区外へ続く。埋土からは多量の瓦が出土した。北で西に振れる。排水にかかわる溝とみられるが性格は不明。

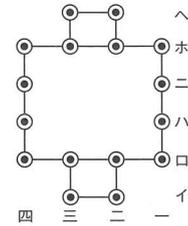
SD7162・SD17877・SD17876 (遺構実測図8・13)

中央建物群(SB7152・SB7150・SB6611)の西側を南北に通る南北溝。北から長さ8m、3m、

9mを検出し、それぞれSD7162・SD17877・SD17876とする。溝幅は約90cm。中央建物群の東側を通る南北溝SD6608に対応する溝で、本来は一連の溝であったとみられる。溝底には石の抜取痕跡があり、SD6608同様に石敷溝であったのだろう。中央建物の西端を画するとともに雨落溝としても機能していたとみられる。北端は建物群の北辺を画する東西溝SD7163と接続する。

SB7155 (遺構実測図8、図版35、図39)

SB7150とSB17870の中間に位置する桁行3間、梁行3間の掘立柱東西棟建物。南北中央間の1間に廂が取りつく。柱間は、桁行約3.6m(12尺)、梁行約3.0m(10尺)、廂の出は、南が約3.0m(10尺)、北が約2.7m(9尺)。掘方の平面は隅丸方形で、一辺約1.3m、径0.4m前後の柱痕跡を残す。廂の柱穴は小規模で、一辺0.6m程度である。東の対称位置にあるSB6650と対応するが、廂の出が異なる(SB6650は、南北それぞれ3.3m、2.4m)。また、SB6650では、南廂の南に、基壇もしくは水路の痕跡と考えられる凝灰岩列を検出したが、SB7155では同様の遺構は検出できなかった。



SB18140A・B (遺構実測図7・12、図版36、図39)

Ⅱ期西第1群の南端の建物。東西2間以上、南北5間分を検出した。東側のSB6660と対応することから、桁行7間×梁行2間の身舎の南北に1間の廂が付く掘立柱の東西棟建物(SB18140A)に、さらに北側に1間の孫廂を付け足した(SB18140B)と考えられる。柱間は、桁行梁行ともに約3.0m(10尺)等間。身舎、廂の柱の掘方は、一辺2m以上の隅丸方形で、一部の柱穴では柱痕跡を残す。対して、孫廂の柱穴掘方は、一辺1.2m程度の隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡を残す。SB6660では、東面に縁束の痕跡と思われる小穴を確認しているが、対応する遺構は、SB18141の柱穴によって破壊されており確認できなかった。

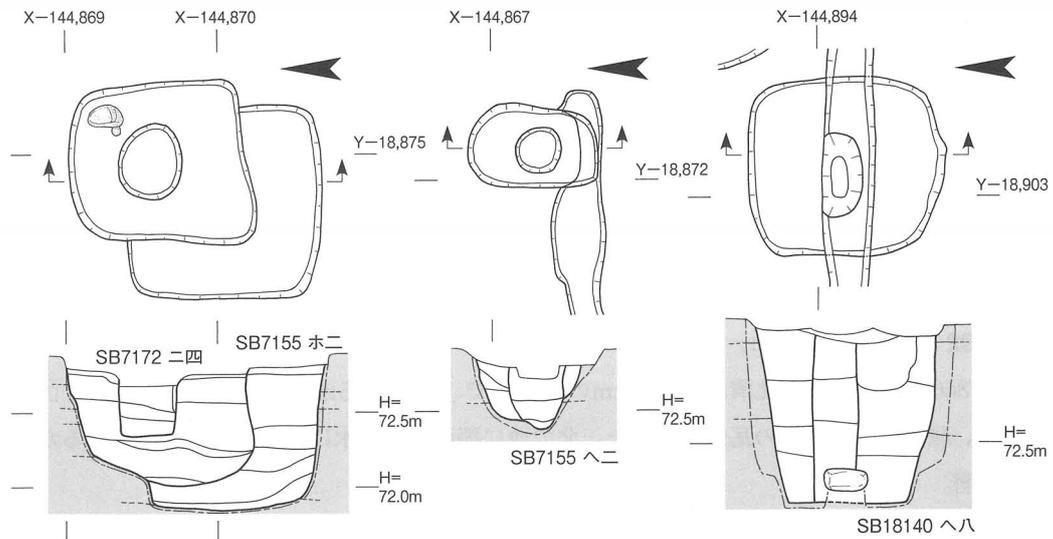
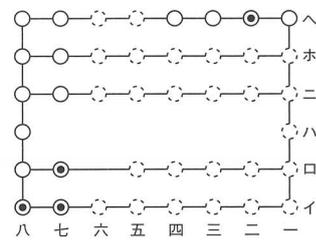


図39 SB7155・SB7172・SB18140 柱穴 1:50

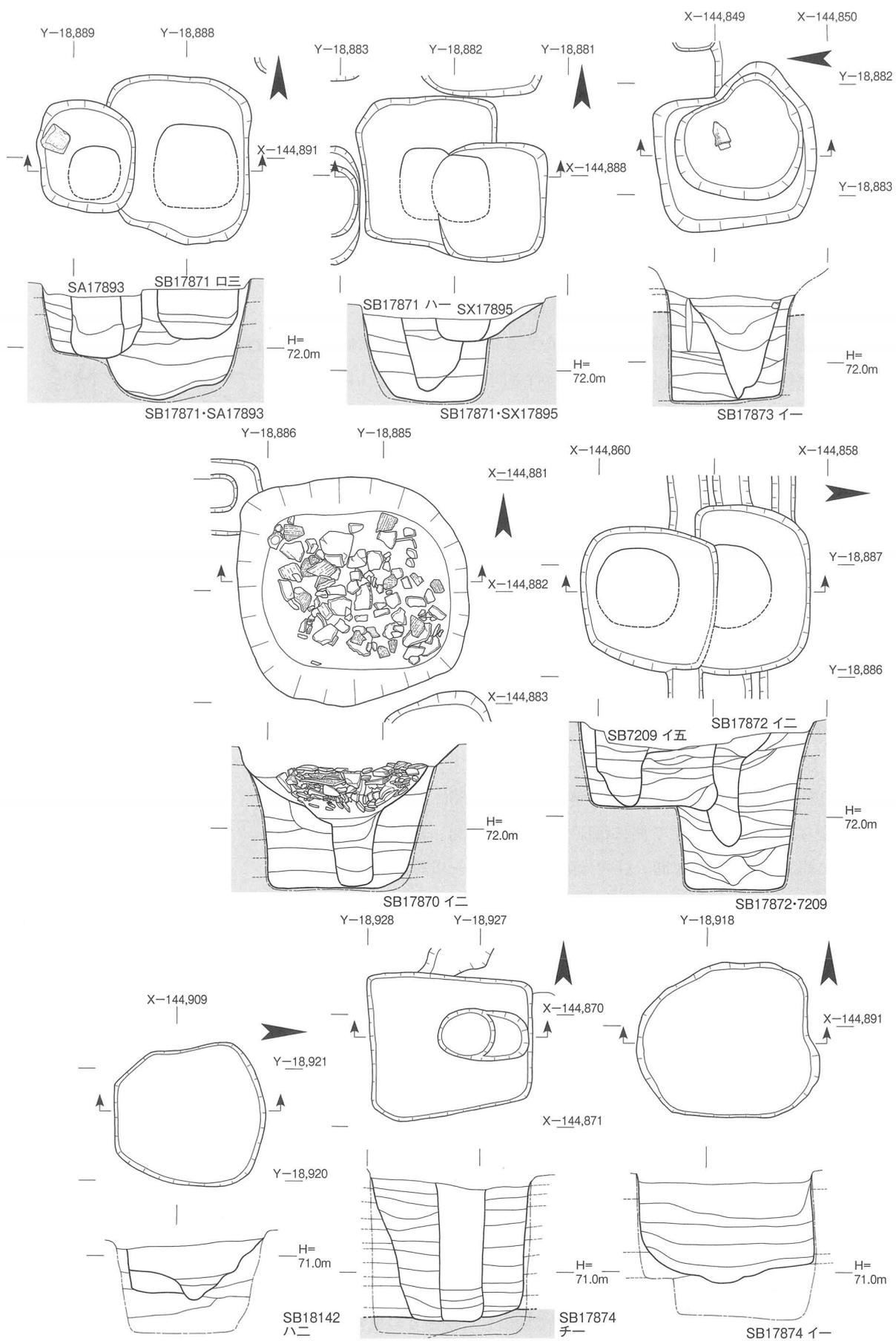
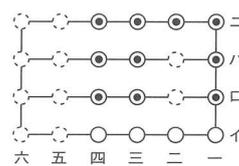


図 40 II 期建物遺構柱穴 1 : 50

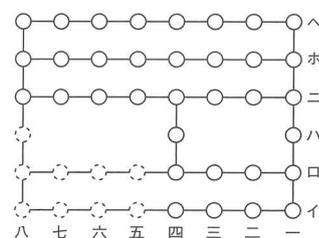
SB17871 (遺構実測図13、図版36・39、図40)

Ⅱ期西第1群の南から2棟目の建物。桁行3間分、梁行3間分を検出した。東対称位置のSB6655に対応することから、桁行5間、梁行3間の東西棟建物と考えられる。柱間は、桁行、梁行ともに約3.0m(10尺)等間。柱穴の掘方は隅丸方形で一辺約1.1m。径50cm程度の柱痕跡を残す。SB6655では南側柱列がSB6660Bの孫廂に掘り込まれるが、SB17871では断面観察の結果、SB18140との重複関係は確認できなかった。



SB17870・SS17885A・B (遺構実測図7・8、図版37・39、図40)

SB17870はⅡ期西第1群の南から3棟目の建物。東側のSB6663に対応する。桁行7間、梁行3間の身舎に南北1間の廂が付く、掘立柱東西棟建物で、柱間は桁行、梁行、廂の出ともに約3.0m(10尺)等間。二通およびハ四に間仕切りの柱をもち、SB6663と左右対称の平面となる。側柱および廂柱の掘方は、一辺160~180cmの隅丸方形で、抜取は上半が漏斗状に掘り込まれ、遺物の多くは上半より出土した。下半は柱を引き抜いたように円筒形である。間仕切り柱は、一辺130cm程度の隅丸方形で、側柱や廂柱と比較して小さく、間仕切り柱と解釈した所以である。

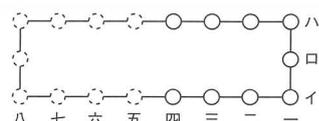


SS17885A・BはSB17870の足場穴で、2時期分を確認した。両者に重複関係はないが、それぞれ建設および解体時の足場と考えられる。

SS17885A・BはSB17870の足場穴で、2時期分を確認した。両者に重複関係はないが、それぞれ建設および解体時の足場と考えられる。

SB17872 (遺構実測図8、図版37、図40)

SB7151A・Bの西に位置する、桁行3間以上、梁行2間の掘立柱東西棟建物。東の対称位置にあるSB6666に対応することから、桁行は全体で7間に復原できる。柱間は、桁行梁行ともに約3.0m(10尺)等間。柱穴は隅丸方形で、一辺約1.4m。



SD17881・SD17882 (遺構実測図8)

SD17881・SD17882は、それぞれ、SB17872の南北約1.8mの位置で検出した素掘りの東西溝。SB17872の南北の雨落溝と考えられる。SD17881は、溝幅約50cmで、東西5.5m分を検出した。SD17882は、幅約60cmで、東西約6.5m分を検出した。SD17882はⅢ期の建物SB7209の柱穴に掘り込まれる。

SB17873 (遺構実測図8、図版37、図40)

SB17873は、SB7152の西に位置する、桁行3間以上、梁行2間の掘立柱東西棟建物。東半のSB6669に中軸で折り返した対称位置で対応することから、全体は桁行7間に復原できる。柱間は、桁行、梁行ともに約3m(10尺)等間。柱穴は隅丸方形で、一辺約1.3m。Ⅲ期のSB7209の柱穴と重複し、SB17873が古い。

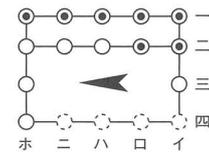


SD17883 (遺構実測図8)

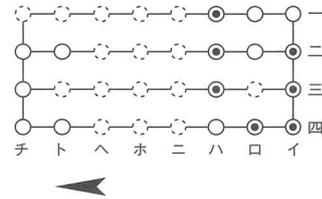
SB17873の南柱列より約1.8m南で検出した素掘りの東西溝。SB17873の南雨落溝と考えられる。溝幅は約60cm、東西約5.5m分を検出した。

SB18142 (遺構実測図12、図版38、図40)

西第2群の南から1棟目の南北棟建物。東側のSB8302に対応する。SB8302では削平のため全体規模が明らかではなかったが、SB18142では桁行4間であることを確認した。梁行は3間で、東側1間が廂となる。柱間は、身舎が約3m(10尺)等間、廂の出は2.4m(8尺)。

**SB17874** (遺構実測図7、図版38、図40)

西第2群の南から2棟目の建物。東側のSB8245に対応することから、桁行7間、梁行3間の掘立柱の南北棟建物と考えられ、そのうち北側1間分、南2間分を検出した。SB8245が総柱の建物であるのに対し、SB17874では、ト一、チ一、ト三の位置で柱穴が確認されず、ロ三でも、想定位置より南で確認されたことより、総柱建物ではない可能性が高い。

**SD17884・SD17888** (遺構実測図6・7)

SD17884はSB17874の北妻柱筋より2.3m(8尺)北で検出した東西溝。東西約4m分を確認した。SB17874の北雨落溝にあたる。SD17888は、西側柱筋より3.0m(10尺)西で検出した南北溝で、SB17874の西雨落溝とみられる。南北約4.5m分を確認した。

SK17875 (遺構実測図8、図版39)

SB1752とSB17873の間で検出した土坑。東西約3.3m、南北4.5m以上で、ほぼ長方形の平面を呈する。深さは最深部で約70cm。埋土中より平城宮瓦編年第Ⅲ期の軒丸瓦が出土し、埋土上面でⅢ期のSS17889を検出したことから、Ⅱ期の遺構と判断した。

SX14340 (遺構実測図14)

石敷擁壁の中央前面で検出した石敷遺構。長径30cm程度の安山岩礫とチャート礫合計7個を上面を揃えて据えている。南北3m、東西1mの範囲で広がる。区画のほぼ中軸線上に位置する。Ⅲ期に想定する内庭部中央通路SF14342に重複するためⅡ期の遺構としたが、検出レベルがやや高く確証はない。Ⅱ期の遺構だとすると、石積擁壁中央に設けた階段などともなう遺構と考えられる。

SK14240 (遺構実測図12)

石積擁壁と西側斜路の接続する部分のすぐ南の内庭広場で検出した土坑。南北10.5m、東西3.5m以上、深さ40~50cmで、東は調査区外に広がる。埋土に平城宮瓦編年第Ⅳ-1期の軒瓦を含むことから、Ⅱ期廃絶時に掘られた廃棄土坑とみられる。

SK17910 (遺構実測図6)

西面築地回廊SC13400の東雨落溝に重複する南北3.0m、東西1.9mの土坑。埋土に平城宮土器Ⅴの土器を含む。Ⅱ期の廃絶段階の遺構であろう。

②区画施設**SC14280** (遺構実測図6・11・20、図版25・26、図28・41)

Ⅰ期以来の築地回廊基壇を再利用し、Ⅱ期に造り直された西面築地回廊である。東西の側柱列の柱穴、築地基底部、東雨落溝を確認した。

側柱列は、東で14基、西で5基を検出した。柱間寸法は、桁行3.8m(13尺)、梁行は側柱心々

Ⅱ期西面
築地回廊

で7.1m (24尺) となり、中央の築地心から側柱心までは、それぞれ12尺となる。北半部に門SX17880を開くが、この部分のみ柱間を4.9m (16尺) としている。柱穴は、深さ約40cmが残存し、礎石はすべて抜き取られており、わずかに根石が残る程度である。SA13404の柱穴を掘り込んでおり、重複関係を確認できる。

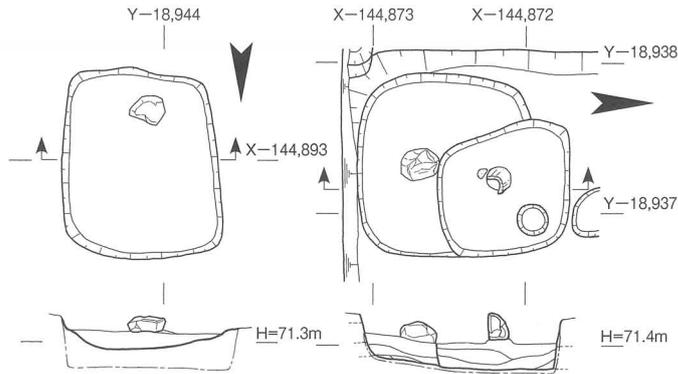


図41 SC14280 礎石掘付・抜取穴 1:50

回廊北部では、築地底部を幅約1.8m、南北23m分確認した。白色粘土や褐色砂質土、黄橙白色粘質土などを版築状に積む。

Ⅱ期南面築地回廊SC3810および北面築地回廊SC6670との接続部分は未発掘であるため、西面築地回廊の南北長は不明であるが、区画が矩形であることから、東面築地回廊と同じく約186m (620尺) に復原しうる。

SD14290 (遺構実測図6、図版40)

西面築地回廊東雨落溝

SC14280の東側柱列の東2.6mの位置で検出した南北溝。西面築地回廊SC14280の東雨落溝にあたる。第217次で約10m、第305次で約4.5m分を確認した。溝は5~10cmの礫を詰めた溝で、幅は40~50cm。見切り石は確認できなかった。X-144,894.5で、石組暗渠SD18160に接続し、区画の外に排水する。

SB17880 (遺構実測図6、図版40、図42)

門

SC14280に開く掘立柱の南北1間の門。東面築地回廊に開く門SB8230に対応する。柱間は約4.5m (15尺) で、南側の柱穴には直径約30cmの礎石が残存する。柱穴間では凝灰岩片の入った、敷石の抜取痕跡とみられる溝を確認した。南の柱穴の南東・南西には、径30~40cmの礎石が残存する。築地端の板壁を支える柱の礎石であろう。

SS14315・SS14289・SS14294 (遺構実測図11)

SS14315は、西面築地回廊SC14280の西側柱筋から西に約1.8mの位置で南北に並ぶ小穴列。2m間隔で4間分、小穴4基を検出した(南より2基目は未検出)。SC13400もしくはSC14280の解体および建設にかかわる足場穴と考えられる。同様の小穴列が、東側柱列の東方でも確認されている。SS14289は、東側柱列より約2m東に位置する南北柱列。柱穴2基、柱間は3m。SS14294は約3m東の南北柱列。柱穴2基、柱間は4m。

SD18160 (遺構実測図6・11、図版41、図43)

石組暗渠

Ⅱ期西面築地回廊東雨落溝SD14290を流れてきた水を回廊基壇を貫いて西外郭へ排水する東西方向の石組暗渠。基壇土を掘り込み凝灰岩の切石をコの字形に組み、蓋石を載せた石組暗渠で、石組7組、全体で東西約7.5m分を検出した。SD14290との接続部分から、築地直下までの石組が残存していたが、築地より西の石組と、築地より東の蓋石はすでに失われている。Y-18,946.5より西側は幅約50cmの素掘溝となるが、そこまでが回廊基壇で暗渠としていた範

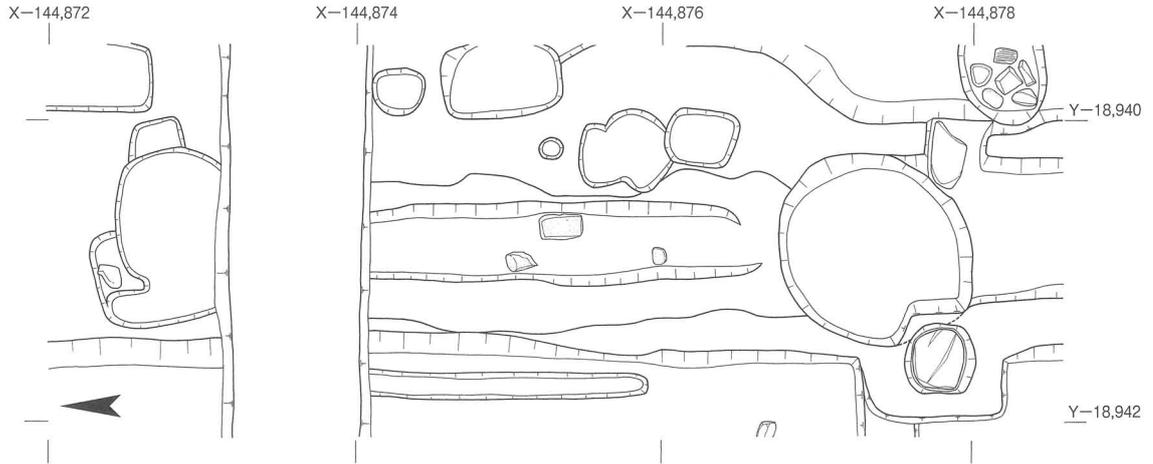


図 42 SB17880 平面図 1 : 50

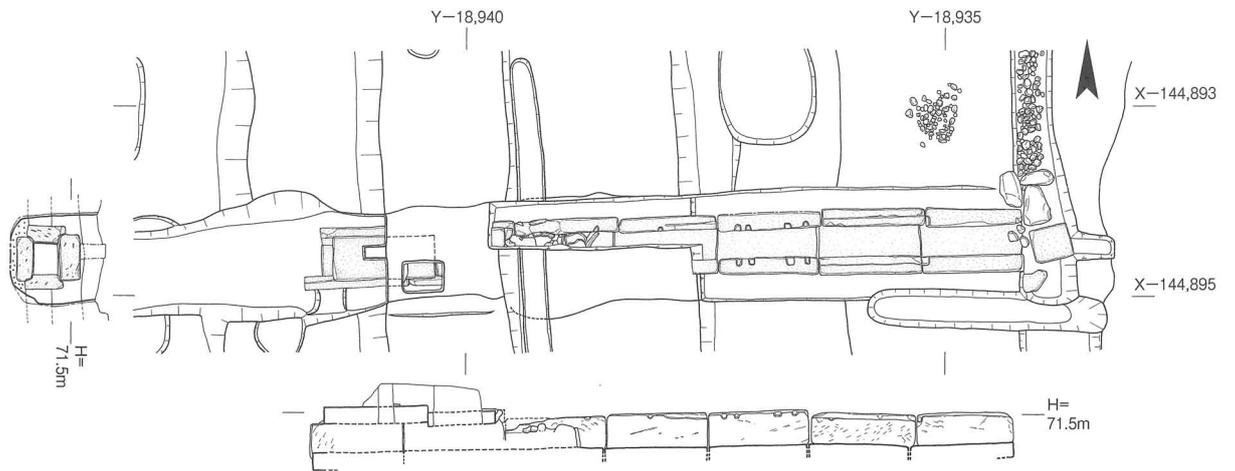


図 43 石組暗渠 SD18160 1 : 80

囲で、それより西は開渠となり西外郭へ流されていたことがわかる。

切石は、長さ105cm、幅50cm、厚さ15~20cm。底石の両脇に側石を据えるが、その際側石の下面内側に欠いて底石の側面に載せている。側石の内法幅は約30cm。側石と蓋石とのおさまりには2種類がある。一つは側石の上方内側を一段下げ、そこに蓋石を落とし込む構造で、もう一つは側石上面に木棧を架けるための欠き込みを各4箇所設け、木棧の上に蓋石もしくは蓋板を載せる構造である。石材の表面には加工時の工具痕（ノミか）が残る。

石材の抜取跡には軒瓦や土器、石などが含まれ、土器は平城宮土器Vに属するもの、瓦は平城宮瓦編年第四-2期に属するものがある。SD18160はII期の造営当初に設けられ、長岡京遷都前後に廃絶したと考えられる。

SC8360 (遺構実測図16)

II期の東面を区画する築地回廊。すでに『平城報告XI』で報告しているが、新たに未発掘部分約7mを調査したので、これまでの成果と併せて報告する。

II期東面
築地回廊

東面築地回廊SC8360は、側柱礎石据付痕跡、築地穴門SB8230・SB8223、西雨落溝などを確認している。礎石据付痕跡は、径1m内外の円形もしくは隅丸方形で、深さ最大約20cmが残

存し、安山岩の根石を残すものもある。東側柱筋で3基、西側柱筋で17基を検出した。柱間寸法は桁行3.9m (13尺)、梁行は7.1m (24尺) となり、西面築地回廊と等しい。築地穴門SB8230を開く部分のみ柱間を4.8m (16尺) と広く取る。さらに南では同様の掘立柱を1基検出した。門SB9223の南柱とするが、北柱とみられる柱穴は確認できなかった。

西側柱筋から西に2.5mの位置には南北溝SD8216があり、西雨落溝と考えられる。約26.4mが残存する。

③区画外の遺構

SX17943 (遺構実測図22)

大極殿院廃絶後の舗装

I期築地回廊廃絶後に、II期南面築地回廊の南から旧第一次大極殿院南面築地回廊基壇上面までに施工された礫敷舗装面。大極殿院廃絶時の瓦だまりSX18585やI期の遺構群を覆って薄い土盛りを施し、その上に径3~10cm程度の礫が敷かれる。『平城報告XI』でII期・III期の礫敷としたものである。また礫敷の上面から北宋銭が出土していることから、礫敷の一部は中世にいたるまで地表に露出していたとみられる。

SX17944 (遺構実測図22・23・24)

大極殿院廃絶後、朝堂院広場に敷き詰めた礫敷。I期の朝堂院広場SH18591の直上に敷かれるため層位的に区別することは困難だが、断面観察で南面築地回廊の南雨落溝SD18596Aを覆う礫層を確認できることから、これをSX17944とした。礫の直径は5cm程度でSX18591の礫と類似するが、瓦片を多く含むのが特徴である。これらの瓦片はいずれも奈良時代の南面築地回廊所用の瓦とみられるため、SX17944は南面築地回廊解体後に敷かれたと考えられる。また礫敷の上面から瓦器片も出土していることから、SX17943と同様、礫敷の一部は中世にいたるまで地表に露出していた可能性がある。

このような礫敷の状況から、大極殿院の南半は大極殿院の廃絶とともに基壇が削平され、朝堂院広場と一体化した広大な空間に再整備されたとみられるが、朝堂院広場と大極殿院内庭の間には、30cm程度の段差が解消されずに残る。

SD13407 (遺構実測図21)

X-145,035付近の旧第一次大極殿院内庭広場を流れる東西溝。幅40~50cm、長さは約17m分を検出し、東は未発掘部分へ続く。埋土は上下2層に分かれ、上層は暗灰茶褐色土、下層は礫混灰茶褐色土。遺構の年代を示す遺物は出土しなかったが、SD13401を掘り込んでいるためII期の遺構とした。SD13407の東延長部分には、II期の東西溝SD7763があり、接続する可能性もある。

SB145 (遺構実測図2、図版55、図44)

北外郭・II期推定大膳職地区の西区南辺に並ぶ東西棟建物のうち、もっとも西に位置する建物。桁行5間、梁行2間。柱間は桁行梁行とも

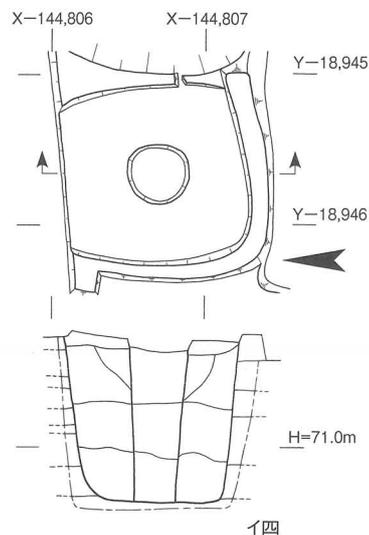
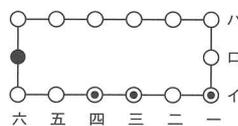


図44 SB145 柱穴 1:50

に約3.0m（10尺）等間。イ四柱を新たに検出した。掘方は一辺約1.2mの隅丸方形で、直径約35cmの柱痕跡を残す。また、ロ六柱は、直径約40cmの柱根が残存していた（『平城報告Ⅱ』）。

SD573（遺構実測図3）

推定大膳職南築地塀SA8100の北雨落溝SD267の東延長部分で、SD3715に接続する東西溝。幅約2.7m。

SX18255B（遺構実測図4）

SX18255Aを改修したSG8190南岸の堤。SX18255Aの上面に土を版築状に積み、堤を南に広げる。

SD12966B（遺構実測図4、図34）

SD12966A直上の第一次大極殿院西辺整地土（I-2期）上面に掘り直された東西溝。幅0.3m、深さ0.2m。SX18256北辺を掘り込み、南堤SX18255B造成土で一気に埋め立てられていることから、作業工程途中の工作用の溝であろう。

SD3825C（遺構実測図4・5・18・19、図版48・49、図29）

SX18255の改修とともに、SD3825を池SG8190からの取水口の東に付け替えたもの。取水口からSD12965合流点までを南西方向へ斜行させ、以南はSD3825Bの上面を南に流す。取水口には堰SX8192・8193を設ける。埋土は灰色砂もしくは黒色粘土。平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器を含み、平安時代の遺物は含まないので、奈良時代末まで開いていたと思われる。

基幹排水路
の改修

SX8192・SX8193・SX8194（遺構実測図4・5、図版48）

SX8192はSD3825Cの取水口に設けられた施設で、掘立柱の柱穴2基が東西に並ぶ。柱間寸法は約4.2m。SD3825Cの堰とみられる。SX8192の西側には柱筋を揃える柱穴列SX8194が続く。堰にともなう塀のような施設か。SX8192は後に北側のSX8193に造り替えられる。SX8193の柱間寸法は約6m。

堰

SD18257B（遺構実測図5、図版53、図33）

SD18257Aを北側に約20cm移動して造り替えた暗渠。東半分の幅50cm程度、西半分の幅90cm程度、深さ40cmの溝が接続したもので、後述するSX18259と同様に、東半分が瓦暗渠、西半分が切石組の暗渠だったとみられる。Ⅱ期整地土の上面で検出した。

SD18260（遺構実測図5）

Ⅱ期整地土中を南北に通る素掘溝。幅約70cm、南北18m分を検出した。整地の施工途中で掘られた水抜き用の溝か。

SD12965B（遺構実測図4、図版52）

Ⅱ期の整地をおこなった後にSD12965Aを掘り直した溝。幅約3m、深さ約60cm。西から東に流れSD3825Cに合流し、後にSD3825Cの手前約13mの位置で南に折れ、SD18220となる。埋土には平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器、平城宮瓦編年第Ⅲ期の軒瓦が含まれる。

SD18220（遺構実測図4・18、図版52、図45）

SD12965Bを南に曲げ南北溝とし、SD3825Cまでの間を埋め立てる。SD3825Cの約13m西側を通る溝で、途中未発掘部分を含め約110m分を確認し、さらに南に続く。埋土は大きく上下2層に分かれ、そのうち下層の灰色砂からは、木筒を含む木質遺物が出土した。

SA18258 (遺構実測図4)

SD18220の東約1.5mにSD18220に沿って建てた南北塀。柱間3間分(全長17m)を確認した。柱間寸法は北2間が2.1m(7尺)、南1間が2.8m(9尺)。

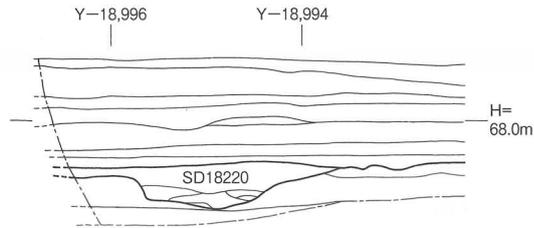


図45 SD18220断面図 1:80

SB18221 (遺構実測図18)

SD18220とSC3825Cの中間で検出した掘立柱建物。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、建物の南1間分のみを検出した。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.4m(8尺)。柱穴は一辺90cmの隅丸方形で、径30cmの柱痕跡を残す。SD18220とSD3825に挟まれた空間のほぼ中央に位置するため、この時期の遺構とした。

SK3860 (遺構実測図18・19)

西区画外で検出した、浅い落ち込み状の土坑。南北約31.2m分を検出したが、南は未調査区部分へさらに続く。深さは約25cm。Ⅱ期整地土を掘り込む。埋土より土師器片が多数出土した。Ⅱ期末の不用品廃棄用の土坑であろう。

SK3821・SK3831・SK3832・SK3833・SK3835 (遺構実測図17・19、図版53)

SD3825の西側で、不整形の土坑を多数検出した。それぞれ独立した遺構として取り上げるが、埋土から出土した土器が接合するものもあり、本来は大きな溜り状の遺構だった可能性が高い。西から流れるSD3838・SD3839があふれたものだろうか。

SK3821は、SD3825の西で検出した土坑。埋土より木片などの有機物のほか、土器、木炭、瓦片が出土した。SK3832は、SK3833の南西で検出した東西に長い土坑。上下2層に分かれる。上層より墨書土器や瓦、木片などが多数出土した。SK3833は、SD3838・SD3839の東端を破壊し、SD3840を掘り込む土坑。埋土は下層が暗褐色粘質土、上層は灰褐色または暗茶褐色土で、前者は木簡断片など木質が多く含まれ、後者は土器・瓦を含み、局部的に著しい量の瓦堆積を検出した。SK3835は、南北に長い土坑。南北2.2m、東西0.9m。底部に炭化物や土器を含む。土坑の北半には、むしろを敷いた上に円座を2個載せた痕跡があり、その上部よりまとめて土器が出土した。

これらの土坑の埋土より出土する土器は平城宮土器Ⅴ・Ⅶのものであることから、Ⅱ期廃絶段階の遺構と考えられる。

SD18259 (遺構実測図5、図版53、図33)

SX18257Bの1m北に新たに設けた東西方向の暗渠。SX18257Bと同じ構造で、東半分は、平瓦を並べた上に丸瓦を伏せた瓦組暗渠で、西半分は切石組の暗渠とみられる。埋土には凝灰岩片が含まれる。

SX17913・SK14260・SK18212・SK18213 (遺構実測図6・11・20)

西面築地回廊西辺で検出した溝状の土坑。SX17913は上下2層に分かれ、上層には礫と瓦を多量に含む。SK14260は、南北9.5m以上、幅約4mで、埋土に平城宮瓦編年第Ⅰ～Ⅳ-1期の軒瓦を含む。SK18212は、東西幅4m、南北長9m以上の土坑で、厚さ約40cmにわたり瓦片が詰まっている。SC13400基壇土とSA13404の柱穴を掘り込んでいる。SK18213はSK18212の連続部分とみられ、小礫と瓦片を含む土坑である。いずれもⅡ期廃絶時の不用品を廃棄したも

のであろう。

SB18295 (遺構実測図2)

北区画外で検出した掘立柱東西棟建物。桁行2間以上、梁行3間の総柱の建物で、柱間は、桁行約3.6m(12尺)、梁行約2.4m(8尺)。東妻柱を平面検出したほか、1間西側の柱も断面のみ検出している。Ⅱ期以降の遺構であるが、SX18296よりも検出面が若干低いため、それよりも古い遺構である。推定大膳職地区Ⅱ-2期の遺構と柱筋を揃えるため、この時期にあてた。

D Ⅲ期の遺構

Ⅲ期は平城上皇が宮殿を造営する時期である。区画施設はⅡ期の築地回廊の築地部分を踏襲し築地塀のみとする。区画内の壇上は、それまでの建物を撤去し、新たに殿舎群を造営する。区画の外は、掘立柱塀による外郭が北面以外の3面を巡り、北端は推定大膳職地区の東西端に接続する。

Ⅲ期の遺構は、壇上の建物遺構に小規模の建て替えが認められるため、Ⅲ-1・2期の2時期に細分するが、本報告の対象とする調査地にはⅢ-2期に該当する遺構はなく、すべてⅢ-1期に属する。

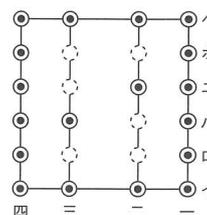
①区画内の遺構

SX17894・SX17895 (遺構実測図13)

SX17894は、SA17892の北から4基目の柱穴より東に連続する掘立柱列。SX17895は、SX17894の南約1.5mに平行に並ぶ掘立柱列。ともに、4間分を確認し、柱間は約1.4mである。柱筋が揃うため、両者が併存する場合、東西棟建物などの遺構となる可能性もあるが、性格は不明。なお、中軸で折り返した地点には対応する遺構は存在しない。

SB7172・SS7228 (遺構実測図8・9、図版42)

正殿SB6620の西北西に位置する、掘立柱建の南北棟建物。桁行5間、梁行2間の身舎の東西に廂が取りつく。柱間は、身舎桁行梁行ともに約2.7m(9尺)等間、廂の出は約3.9m(13尺)である。廂の柱はすべて検出したが、身舎柱の一部は未検出。東で対称位置にあるSB7173においても身舎柱はほとんど検出しておらず、身舎柱の一部は礎石建であった可能性がある。掘方の平面は隅丸方形で、一辺約1.5m。径45cm程の柱痕跡を残す。



SS7228は、SB7172の足場穴。桁行6間、梁行5間の総柱となる。

SA17891 (遺構実測図6・7・8、図版44、図46)

殿舎地域西半部で東西に通る掘立柱塀。SB7172の南妻柱より西面築地塀に続く。柱間は3.1m(10.5尺)で、SB7172の西南隅柱より柱穴5基と、途中未発掘部分を挟み、西面築地塀東で柱穴3基を検出した。東側のSA6624に対応する。未発掘部分で南北塀SA17896・SA17897と接続するとみられる。

SA17896 (遺構実測図7・8、図版44)

SB17870に重複する掘立柱の南北塀。東側のSA6625に対応する。柱間は3.1m(10.5尺)で、柱穴4基を検出した。掘方は隅丸方形で一辺約0.9~1.3m。径約30cmの柱痕跡を残すものもある。

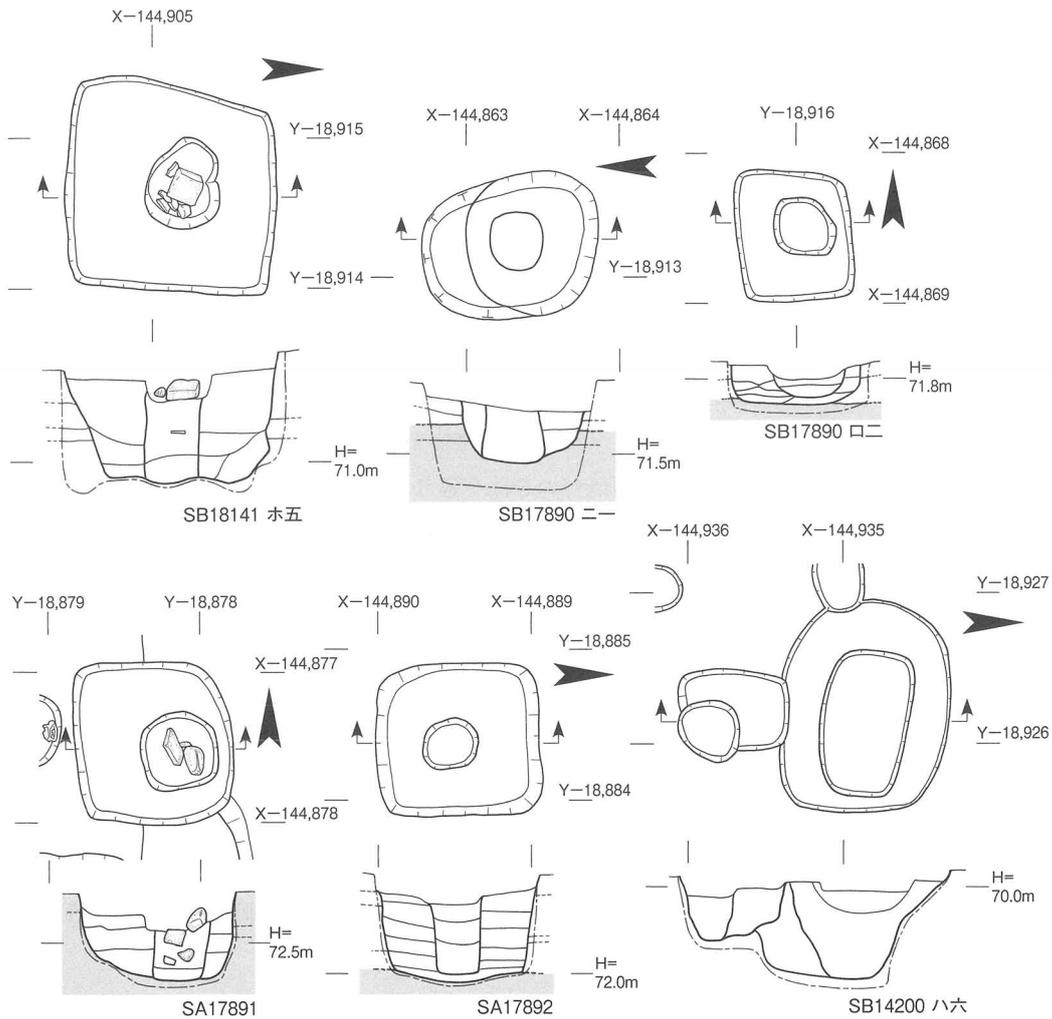


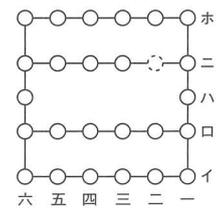
図 46 Ⅲ期建物遺構柱穴 1 : 50

SA17897 (遺構実測図7、図版44)

SA17896の9m西で検出した掘立柱の南北塀。SA17896と柱筋を揃え、東側のSA6629と対応する。柱穴3基を検出したが、深さは非常に浅く、南は削平が著しく確認できなかった。

SB7209・SS17889 (遺構実測図8、図版43)

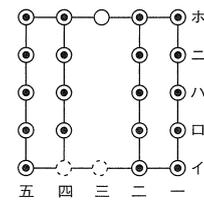
Ⅲ期後殿SB7170の西に柱筋を揃える掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁行2間の身舎の東西に1間の廂が付く。柱間は、桁行2.5m(8.5尺)、梁行2.7m(9尺)、廂の出3.6m(12尺)である。身舎柱の柱穴の掘方は一辺0.9mの隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡を残す。一方、廂柱は長辺1.5m、短辺1.1mの隅丸長方形で、径約40cmの柱痕跡を残しており、身舎柱に対して廂柱が大きいという特徴をもつ。中軸に対して東側で対応するSB6621では、身舎の柱は礎石建としていたが、SB7209ではすべて掘立柱であった。SB17872・SB17873の柱穴を掘り込んでいる。



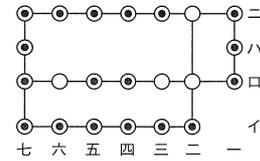
SS17889は、SB7209の足場穴。東西6間、南北4間の総柱遺構。

SB18141 (遺構実測図12、図版43、図46)

SB18140に重複する掘立柱南北棟建物。東側のSB8300に対応する建物で、桁行4間、梁間2間の身舎の東西に1間の廂が取りつく。柱間は、桁行・梁行・廂の出ともに約3m(10尺)等間。柱穴掘方は一辺約1.3mの隅丸方形で、径40cm程度の柱痕跡を残す。SB18140よりも柱穴が浅い。

**SB17890・SS17904** (遺構実測図6・7、図版43、図46)

SA17897と西面築地堀の間に位置する東西棟建物。桁行5間、梁行2間の身舎に、東面および南面に1間の廂が取りつく。柱間は、身舎の東より2間目が2.4m(8尺)となる以外は桁行、梁行ともに2.7m(9尺)、廂の出は、東廂が3.3m(11尺)、南廂が3.6m(12尺)となる。柱穴は、深さ約0.3mが残存し、隅丸方形で一辺は最大で1.1m。中軸で折り返した位置にある東半のSB8219もしくはSB8224に対応すると思われるが、いずれの建物とも規模や平面が異なっている。また、Ⅱ期の建物SB17874と重複するが、残存する掘方の深さが、SB17874と比べて約1mも浅く、仮設的な建物だった可能性も残る。



SS17904は、SB17890の北柱列より南に1.8mの位置で検出した東西方向の柱列。東西3間分を確認した。柱間は2.3~2.7mで一定ではない。SB17890の足場穴か床東と考えられる。

SA17892 (遺構実測図8・13、図版44、図46)

SA17891の東から3基目の柱穴より南に延びる掘立柱南北堀。東側のSA6623に対応する遺構で、5間分を検出した。掘方は隅丸方形で一辺約1.0m、径0.3m程度の柱痕跡を残す。

SA17893 (遺構実測図8・13)

SA17892の西4.7mで平行に並ぶ掘立柱南北堀。柱間は約2.0m(6.5尺)で、柱穴5基を検出した。SB17871の柱穴を掘り込むことからⅢ期の遺構としたが、東側に対応する遺構はない。

SB17899 (遺構実測図6)

西面築地堀際で検出した、桁行4間、梁行1間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行3.0m、梁行2.5m。南妻柱筋はSA17891に揃うが、南東隅柱を確認しておらず、南北3間の建物である可能性も残る。小規模の小屋のような建物か。

SB18146 (遺構実測図7)

Ⅱ期の建物SB17874に重複する桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物。柱間は約2.4m(8尺)等間。東側のほぼ対称位置にはSB8305が確認されているが、規模、振れなど、異なる点が多い。しかし、両者ともに小規模で、仮設的な建物とみられる。

SA17898 (遺構実測図7)

SA17897の約3m西で柱穴1基を検出した。東側のSA8225と対応する位置にあることから、南北堀の柱穴で、調査区の南北に続くとみられる。

SD18143 (遺構実測図12)

SB18140の北身舎柱列を掘り込む東西溝。幅約0.6m、深さ0.1mで、東西約10m分を検出した。埋土に土器を多く含む。

SD18144 (遺構実測図7・12)

SB18140を掘り込む東西溝。東西約18m分を検出した。SD18143よりも深さは浅いが、埋土

に土器を少量含む。

SD18145 (遺構実測図7)

SB18140の北側柱列を掘り込む東西溝。断続的に東西に続く。幅約0.3m、深さ約0.1m。西延長部分にⅡ期の石組暗渠SX18160が位置するが、SB18140との重複関係より、Ⅲ期の遺構とした。

SX18151 (遺構実測図6)

SD18155の東側に広がる礫敷面。わずかに中世の土器が混入するが、Ⅲ期造営時に壇上の礫敷舗装が部分的に残存したものと考えられる。SB18146の西方で検出した。Ⅱ期西面築地回廊東雨落溝SD14290を覆う。

SD17901A・B (遺構実測図8)

SB7170の西5.6mに位置する南北溝。北は調査区外へ続く。幅約1.0mの溝SD17901Aに幅0.5mの溝SD17901Bが重複する。前者が暗渠の据付痕跡で、後者が抜取痕跡と考えられる。

SD17902A・B (遺構実測図8)

SD17902は、SD17901の南端より東に進む暗渠。SD17901と同じく、据付痕跡SD17902Aと抜取痕跡SD17902Bの二つの溝が重複する。これらの溝は、Ⅱ期の建物SB7151の柱穴を掘り込むため、Ⅲ期に比定できる。

SF14342・SD7133・SD14341 (遺構実測図13・14・15、図版45)

内 庭
中央通路

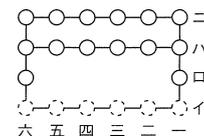
SF14342は南門より石積擁壁までの内庭部中央を南北に通る通路。通路の側溝とみられる南北溝2条を検出した。SD7133は東側の側溝で、幅70cmの石組溝。南北5.2m分を検出した。溝底に扁平な安山岩を敷く。側石はすでに失われている。SD14341は西側の側溝。南北5m分を検出した。溝底で凝灰岩の切石列を2m分検出した。この2条の溝の間が通路SF14342となり、その東西幅は48.1m(160尺)となる。SD7133の北延長上にⅢ期の南北溝SD6612があり、壇上の排水を受けている可能性が高い。『平城報告Ⅺ』では、SD7133が石組擁壁より約7.3m南で東に折れ、東西溝SD9236に接続した可能性が指摘されている。

SD14241 (遺構実測図12、図版45)

SB14200の北東で検出した石組溝で、東側の東西溝SD9236に対応する。溝幅は1.3m、長さ2.2m分を検出し、東はさらに調査区外へ延びる。南岸は人頭大の安山岩を護岸とし、北岸はそれよりも小振りの凝灰岩で護岸する。凝灰岩列は安山岩列よりも上層に据えられており、何らかの改修があった可能性がある。SD14241が東に延び、内庭中央通路西側溝SD14341に接続したと考えられる。

SB14200 (遺構実測図12、図版46)

西側斜路SF14255Aの磚積擁壁の抜取痕跡を掘り込む東西棟建物。東側の東西棟建物SB9220に対応する。桁行5間、梁行2間の身舎の北側に1間の廂が付く。柱間寸法は桁行・梁行・廂の出ともに2.4m(8尺)。Ⅱ期の斜路SF14255Bの位置にも重なることから、SB14200を建てた段階では、斜路の登り口が北側に寄っていたと考えられる。



SK17905・SK17907 (遺構実測図7)

SK17905は、南北1.3m、東西2.5mの楕円形の土坑。SK17907はSB17870へ八柱に重複する土

坑。ともに、埋土に平城宮土器Ⅶの土器を含む。

②区画施設

SA3800・SD8226（遺構実測図16）

Ⅱ期の東面築地回廊の築地部分を踏襲して造られた築地塀。『平城報告Ⅺ』ですでに報告した遺構であるが、一部未発掘の部分を新たに調査した。これまでの成果と併せて報告する。

SA3800の遺構は、築地、雨落溝、暗渠の他、築地に開く門を確認している。築地本体は、茶褐色砂質土の積土が残存するが、版築を示す縞状の土層は確認できず、Ⅱ期の積土や、築地崩壊土との識別は非常に困難である。残りの良いところでは高さ約1mが残存していた。

築地心より西約2.6mの位置では、西雨落溝SD8226が断続的に残り、X-144,862付近では、築地を貫く石組暗渠SD8227を検出した。SD8226は、残りの良いところでは凝灰岩・安山岩の切石の側石が残存し、さらにその上に瓦を重ねる様子を確認している。

区画の中央付近には西面築地塀と対称の位置に3間門SB8310を開く。SB8310の南には凝灰岩切石が東西に並ぶ。築地寄柱の礎石とみられ、石の間隔は外側で約1.6mあり、これが築地基底部の幅を示すと思われる。

SB8310（遺構実測図16、図版46、図47）

東面築地
塀SA3800
に開く掘立
柱南北棟の

門で、西面の門SB14300に対応する。桁行3間、梁間2間の3間門で、柱間寸法は、桁行中央間が3.9m（13尺）、南北脇間が2.4m（8尺）、梁行は2.7m（9尺）である。妻柱筋をSA3800の築地心に揃える。柱穴の掘方は一辺約1mの隅丸方形で、深さは最大で75cm。

Ⅱ期の東面築地回廊

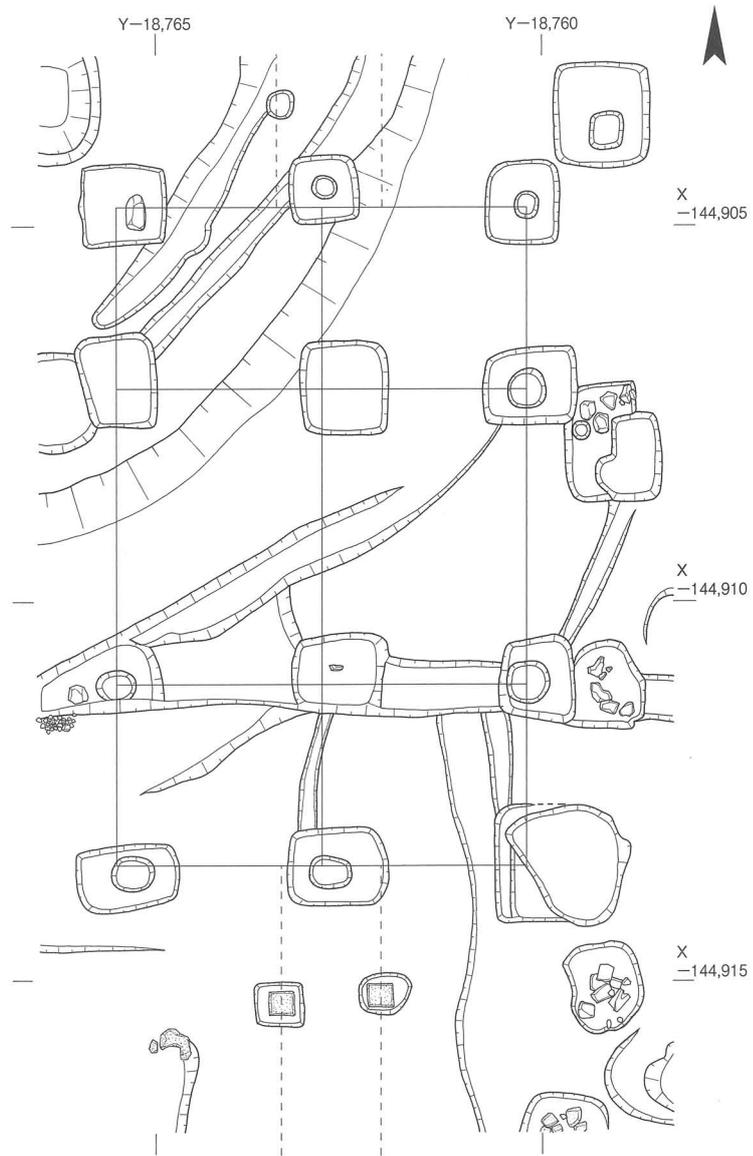


図47 SB8310平面図 1:100

Ⅲ期東面
築地塀

SC8360の側柱痕跡を掘り込む。

SA14330・SD14320（遺構実測図6・11・20、図版25・26）

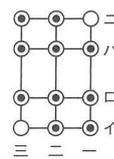
Ⅲ期西面
築地塀

Ⅲ期の西面を区画する築地塀。東面築地塀SA3800に対応する。Ⅱ期の西面築地回廊SC14280の築地基底を踏襲して造られており、瓦を含む積土が残存し、これより上がこの時期に新たに積み直された部分と考えられる。

想定築地心の東で、築地塀東雨落溝とみられる南北溝SD14320を検出している。東面のSD8226に対応する遺構で、全長25.8m分を確認した。溝幅は40～80cm、深さは最大で20cm程度である。築地想定心からの距離は2.3～3.0mと幅があり、この値より直接築地塀基壇幅を求めるのは困難である⁴⁾。この溝からは、平城宮土器Ⅶに属する土器が出土している。

SB14300（遺構実測図11、図版46、図48）

西面築地塀SA14330に開く掘立柱の門で、東面築地塀SA3800に開く門SB8310に対応する。桁行3間、梁行2間の3間門で、柱間寸法は桁行中央間が3.9m（13尺）、両脇間が2.4m（8尺）、梁行が2.7m（9尺）。柱穴掘方は一辺約1.1mの隅丸方形で、深さは最大80cmで、径40cm程度の柱痕跡を残す。ロニ・ハニの2基の柱穴は、側柱に比べ柱穴底面のレベルが30cm程度高く、柱痕跡の直径も約30cmと細い。



SB18210（遺構実測図20）

西面築地塀SA14330に開く穴門で、築地想定心上で礎石痕跡穴を2基検出した。柱間寸法は約3m（10尺）。

③区画外の遺構

SB12960（遺構実測図4、図版54）

SD12965B・SD18220の埋土上面で検出した東西棟建物。桁行4間以上、梁行2間の身舎の南北に廂が取りつく。柱間寸法は、桁行2.1m（7尺）、梁行1.5m（5尺）、廂の出は北廂1.7m（5.5尺）、南廂1.9m（6.5尺）。柱穴掘方の平面は一辺60cmの隅丸方形で、径25cm程度の柱痕跡を残す。SD18220廃絶

以後の遺構である。

SA3740（遺構実測図21、図版47）

外郭施設

Ⅲ期南面築地心より35.6m南を東西に通る掘立柱塀。Ⅰ期の内庭部分を横断し、東端はSA8238に接続する。『平城報告Ⅺ』ですでに東半分について報告済みであるが、新たに西延長部分を確認し

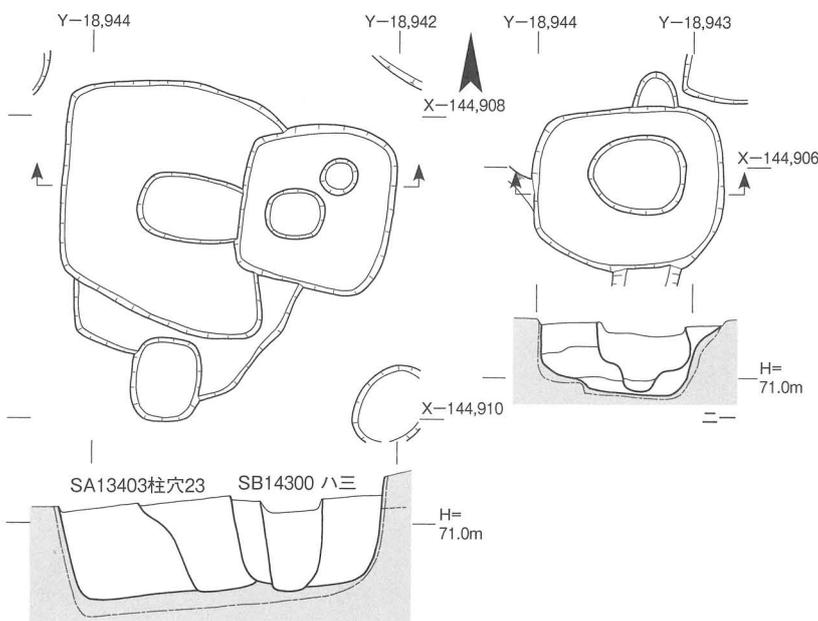


図48 SB14300柱穴 1:50

た。途中未発掘部分を含み東西長は約212mとなり、さらに西に続くと思われる。柱間寸法は2.4~3.0m(8尺~10尺)。東端より3間目は柱間を広く取り一間門SB3768を開き、西端では同じく一間門SB13412を開く。

SB13412 (遺構実測図21、図版47)

SA3740の西端で検出した掘立柱の一間門。柱間寸法は5.4m(18尺)。東側のSB3768に対応する遺構である。

SD3789 (遺構実測図21、図版47)

SA3740の南2.5mを通る東西溝。溝幅約1m、深さ10cmの素掘溝で、区画中央がもっとも高く、そこから東西に傾斜を与え水を流していたようである。I期の遺構を掘り込む。

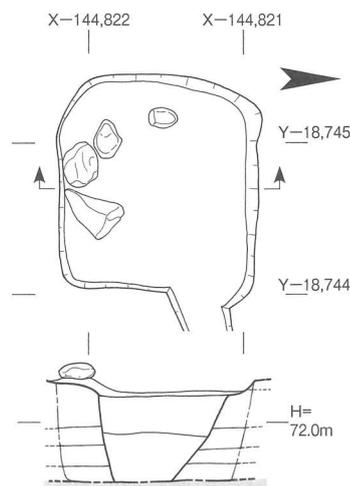


図49 SB12342柱穴 1:50

SD13410・SD13411 (遺構実測図21、図版47)

SD13410はSA3740の北2.5mを流れる東西溝。第192次調査区で東西24m分を確認し、I期東面築地回廊に重複する部分でも東西約11m分を検出しており、規模もSD3789と等しい。SD3789同様、本来はSA3740の北側に沿って東西に流れており、SA3740の雨落溝としても機能していたのだろう。

SD13411は、SD3789とSD13410の西端をつなぐ南北溝で、約3m分を確認した。

SA8238・SD8237・SD8239

SA8238は、東面築地塀SA3800の東17.8mに位置する掘立柱南北塀。推定大膳職地区南東隅部分より南に延び、東西塀SA3740に接続する。柱間寸法は2.4~3.0m(8~10尺)。『平城報告XI』で報告した遺構であるが、新たに推定大膳職築地塀東南隅との接続部分で、一間門SB12342を検出した。

SA8239の東西4.4mの位置には、それぞれ南北溝SD8237・SD8239が流れる。幅約1m内外、深さ約30cm。いずれも、X-145,000付近より南は削平され残存しないが、SA3740とSA8239が接続する塀の東南隅部分では、SD8237はSA3740の北雨落溝SD13410と、SD8239はSA3740の南雨落溝SD3789と接続したと考えられる。

SB12342 (遺構実測図3、図版47、図49)

SA8238の北延長上にあり、推定大膳職地区を画する築地塀の東南隅部分(SA350・SA8100接続部)に取りつく門。柱穴2基を確認した。柱間寸法は約4m(13.3尺)。掘立柱から礎石建へ建てなおしており、掘立柱の抜取穴を埋め立てた後に据えた根石が多数残存する。

SA3853・SA3854 (遺構実測図20、図版47)

SD3850の西で検出した南北塀。両者とも柱間寸法は2.7~3.3mと一定ではない。SA3853はSA3854をやや北にずらして造り替えたもので、柱間8間分を確認した。北は未調査部分に連続する可能性が高い。SA3853・SA3854は、柱間寸法が不揃いであること、回廊の外側にあることなどⅢ期の東外郭南北塀SA8238と共通点が多く、SA8238に対応する可能性がある。SA8238と対応する遺構だとすると、北側の推定大膳職地区の西築地塀に接続することになる。

SX18296 (遺構実測図2)

北区区外で検出した南北2基の掘立柱穴。北の柱穴は断面のみ確認した。南の柱穴は、抜取穴により定かではないが、掘方は一辺1.2~1.3mの隅丸方形と考えられ、柱間は約3m(10尺)等間に復原される。南側に連続する遺構がないので、建物の東南隅部分の可能性がある。西および北に遺構が続くと考えられるが、柱穴は確認していない。Ⅱ期以降の遺構で、SB18295よりも新しいためⅢ期の遺構とした。

E 平安時代以降の遺構

第217次西調査では、奈良時代の遺構面を覆う暗茶褐色砂質土層の上面で鋳銅にかかわる遺構を検出している。暗茶褐色砂質土中には瓦器が含まれているため、遺構の年代は平安時代末期~鎌倉時代初期とみられる。鋳銅にかかわる遺構としては、炉跡、表面が焼けた穴、木炭を含む穴などを確認した。また、その北側では2時期の建物・塀遺構を検出している。いずれも小規模で、方位も正方位より北で西に若干振れている。塀が鋳造遺構と建物を画するように配置されており、鍛冶に関連した仮設的な小屋と考えられる。同様の遺構は第217次西調査区の南壁でも確認されており、関連遺構はさらに南にも広がっていたようである⁵⁾。

SX14207・SX14203・SX14204 (遺構実測図12、図版57、図50・51)

炉跡 SX14207は、長径90cm、短径70cmの楕円形の炉跡。深さ20cm程度。底部を平坦にし、埴塼を据えるための直径20cm程度の石4個を置く。壁面には磚・瓦・礫などを貼りつける。穴の底部の石の周辺には炭が薄く堆積するが、西側にはその広がりがみられないため、西側にフイゴがあったのかもしれない。SX14207からは、埴塼、ササ混じり土製品等が出土した。

SX14203は、直径55cmの円形の炉跡。深さ約10cmで、壁面に磚を貼り付けている。SX14204は、SX14203の北西で検出した一辺50cm程度の方形の穴。赤褐色に焼けている。

これらの遺構の周辺には、焼土や炭の混じる小穴が多数広がる。調査区の南壁でも検出しており、遺構はさらに南にも広がるものとみられる。

SB14221・SA14243・SA14244 (遺構実測図12、図版57、図51)

SB14221は桁行2間、梁行1間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行2.2m、梁行1.1m。SA14243はSB14221の東1.4mでSB14221と方位を揃える掘立柱塀。南北3間分を検出した。柱間寸法は2.1m。SA14243は南端で西に折れSA14244となる。SA14244は東西3間分を確認した。柱間寸法は1.8m。

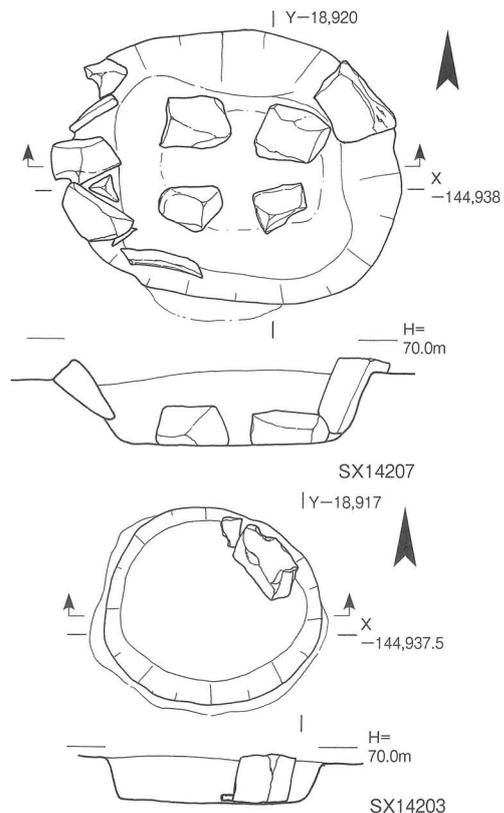


図50 SX14207・SX14203 1:20

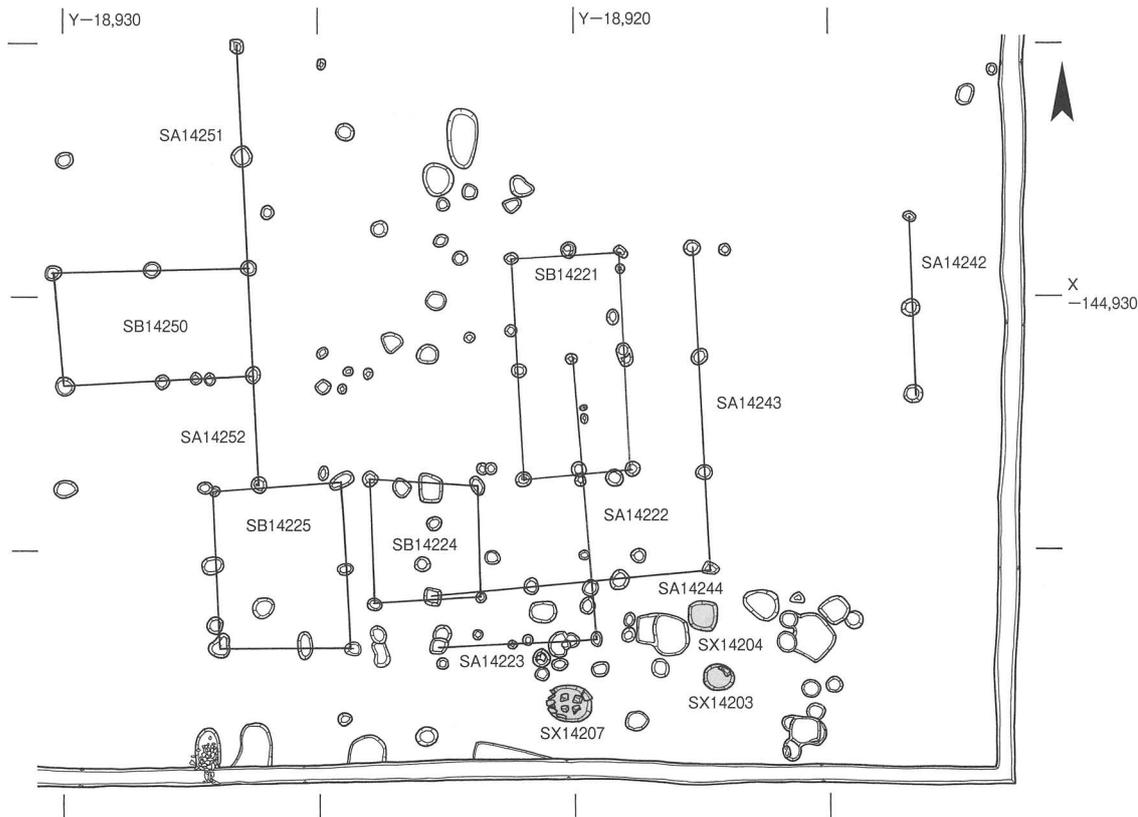


図 51 鑄造関連遺構平面図 1 : 150

SB14224・SA14222・SA14223 (遺構実測図12、図版57、図51)

SB14224は1間四方の掘立柱建物。柱間寸法は2.0~2.5m。SA14222はSB14224の東2.1mにSB14224と並行する掘立柱塀。柱間寸法は一定ではなく、1.0~2.4m。南北3間分を検出した。SA14222の南端から西へ続くSA14223が接続する。柱間寸法は1.5m。2条の塀が建物を取り囲む形はSB14221と同じである。

SB14250・SA14251・SA14252 (遺構実測図11・12、図版57、図51)

SB14250は桁行2間、梁行1間の東西棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.0m。SA14251はSB14250の北東隅の柱から北に延びる掘立柱塀。柱間2間分を確認した。柱間寸法は2.2m。SA14252はSB14250の南東隅の柱から南に延びる掘立柱塀。柱間1間分を検出した。柱間寸法はSA14251と同じく2.2m。

SB14225・SA14242 (遺構実測図12、図版57、図51)

SB14224の西に建つ桁行2間、梁行1間の掘立柱建物。柱間寸法は桁行1.5~1.7m、梁行2.6m。SA14242はSA14243の東で検出した掘立柱塀。南北2間分を確認した。柱間寸法は1.7m。

F 時期不明の遺構**SD3838・SD3839** (遺構実測図17、図版54)

西区画外で検出した東西溝。西から東へ流れ、東端はSK3833で破壊されている。SD3838は幅約1.4m、埋土は茶褐色粘質土。SD3839は、幅約1.6m。

SD3845 (遺構実測図17・19)

西区画外で検出した、L字型に流れる溝。幅約0.6mで埋土は黒色粘土。埋土より瓦が出土しており、奈良時代の遺構と考えられるが、SD3840との重複関係は明確ではない。

SD3834 (遺構実測図19)

SK3833の底で検出した石組溝。上部はSK3833により破壊され、一部の側石と転落したとみられる石が残存するのみである。幅は側石の心々で約50cm。東端に3本の丸太を叉首状になるように斜めに設置するが、性格は不明。

SA3855 (遺構実測図18・19)

SA3853・3854の西約4.6mで検出した南北方向の塀。柱間6間分を確認した。

SA18298 (遺構実測図2)

SB18295の南で検出した東西方向に並ぶ柱穴列。柱穴2基を確認し、柱間寸法は4.8m(16尺)である。柱穴の平面は径80cm程度の円形を呈する。南北方向に対応する柱穴がないため塀としたが、東西棟建物の身舎部分の可能性も残る。I-3期西面掘立柱塀SA13404の柱穴を掘り込んでいるため、II期以降の遺構とみられる。

SX13406 (遺構実測図21)

II期礫敷上面で検出した1間四方に並ぶ柱穴群。柱間寸法はそれぞれ約4.5m。II期の東西溝SD13407と重複する。III期以降の遺構。

-
- 1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘方 ◎柱痕跡をとどめる掘方 ○掘立柱 □礎石抜取痕跡 …推定
 - 2) 奈良文化財研究所2009『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 I 基壇・礎石』学報第79冊。
 - 3) 小澤毅1993「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』。のち小澤『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003所収。
 - 4) 平城第438次調査では、側石を残す南北溝

- SD19281を検出しており、この側石が基壇外装を兼ねていたとすると、I・II期築地心と側石の距離は約2mで、基壇幅は3.9m(13尺)に復原されるとする(奈良文化財研究所2009「第一次大極殿院の調査」『紀要2009』)。
- 5) 平城第438次調査でも同様の鍛冶関連遺構が確認されており、第一次大極殿院地区の北西部では平安時代末から鎌倉時代初期にかけて、かなり広範囲におよぶ工房施設が営まれていた可能性がある(同上)。